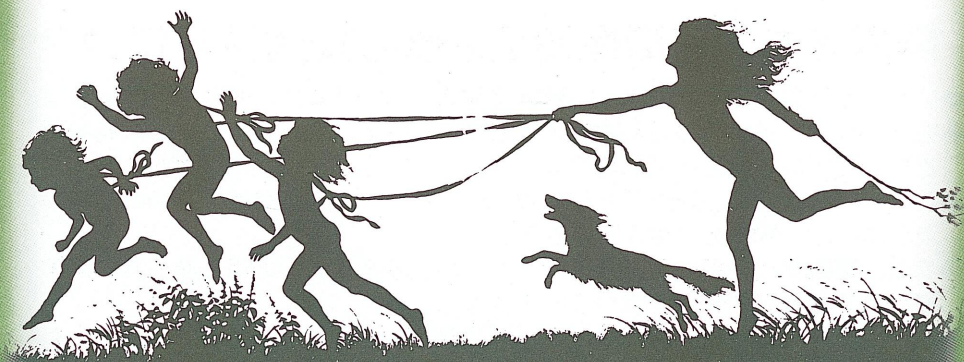


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

12



第八十四卷 第十二号 日本幼稚園協会

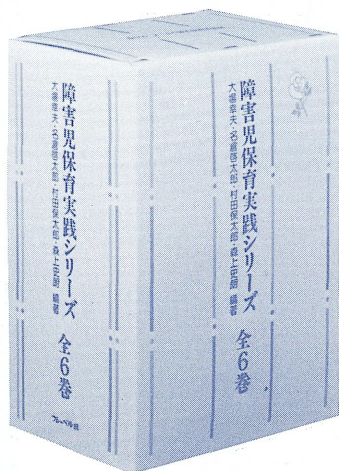


新刊!!

# 障害児保育実践シリーズ

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗 編著

## 〈全6巻〉



第1巻 自閉的な子どもと保育

第2巻 発達に遅れのある子どもと保育

第3巻 ことば・聞こえ・見る  
ことの障害と保育

第4巻 病虚弱・肢体不自由の  
子どもと保育

第5巻 心に問題をもつ子ども  
と保育

第6巻 障害児保育の基礎

## 障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

- ♣いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。
- ♣症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。
- ♣このシリーズでは、実際例をたくさん出しあつて、なにをどのように指導したらよいか、具体的に考えていきます。
- ♣また、実践者との座談会を随所にとり入れ、現場のナマの声を通して保育者にとって必要な問題点を探っていきます。
- ♣たんなる理論書や研究書ではなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。
- ♣豊富な事例、適切な助言、イラストも多く読みやすいこのシリーズは、きっとお役に立ちます。

A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価10,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十四卷 十二月号

幼児の教育 目次

— 第八十四卷 十二月号 —

© 1985

日本幼稚園協会

園長室の窓から……………黒田 成子(4)

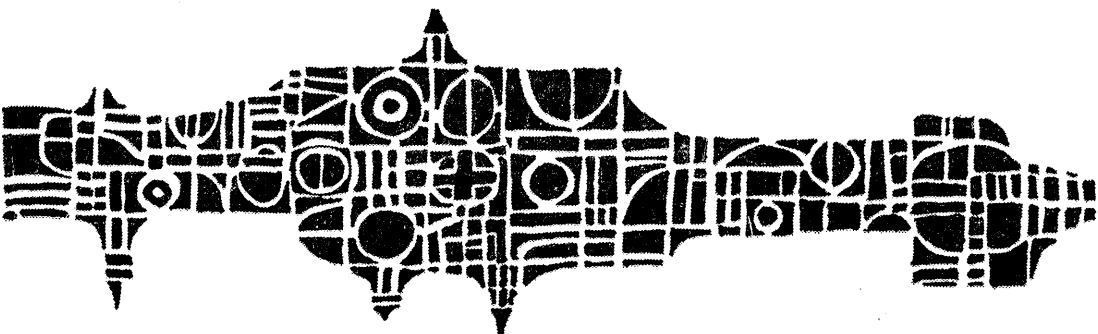
保育の実践と理論を求めて……………津守 真(7)

SF的読み解き 子どもという風景

第九回 忘却という贈物……………堀内 守(16)

宗教学人類学からみた子ども ⑤

ポルターガイストの話(一)……………関 一敏(26)



坂元彦太郎先生を囲んで……………(34)

兔園隨筆 ⑩

心の聴覚……………蕪木 寿江(40)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち……………村石 京子(44)

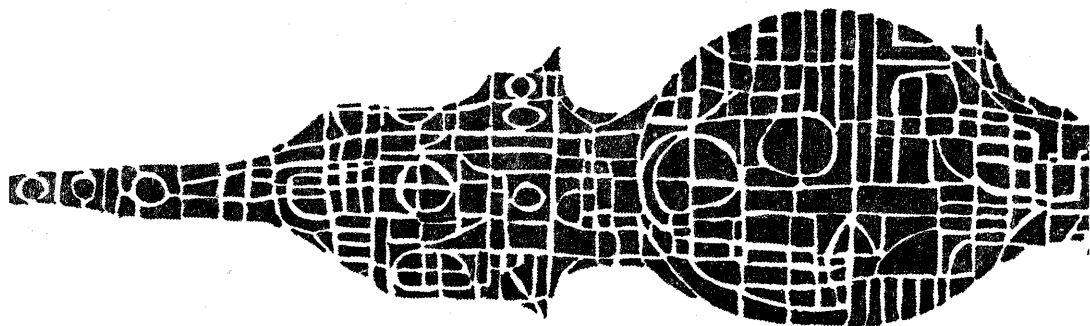
若いお母さんたちへ……………菊池 慶子(50)

子どもたちのこと……………大橋利恵子(58)

八十四卷総目録……………(61)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より

カット・福田理恵



## 園長室の窓から

黒田 成子

このような仮の題を編集の方から頂いたが、一四〇坪しかない狭い敷地にあるわが園舎には園長室さえない。実は六年前、園舎を改築した時、たとえ狭くとも園長室があった方が良くと考え、一坪余の園長室を作った。

ところが一年もたたないうちに隣りの職員室で始められた母親達の勉強会が予想より人数が多くなり、とうとう職員室につづく園長室の壁をこわすことになった。壁の代りにアコーデオンのしきりができ、お母様達の人数は少々ふえても園長室の方へ腰かけられるようになった。いつしかアコーデオンのしきりはいつも開放されたままとなった。少しのスペースでもあればただちに利用するわが園のやり方、たちまち季節外の絵本やダンボール箱等の置き場となってしまう。しかし、園長室の壁が消えたおかげで、隣りの先生方やお母様方と自由に話ができるようになった。これが一番の大きいメリットであった。

さて、此処にいていつも私が心をひかれるのはホールや庭や二階などで遊んでいる子ども達のことである。が、園長事務等のためになかなかゆっくりと子ども達の仲間入りがで

きないことが残念である。子ども達もよく心得たもので、私が皆はどうしているかしらと思つてチェックするような気持で一通り見て歩くときは気にもとめない様子である。しかし、私がゆっくりとたたずんでいたり、じゅうたん階段に坐つてリラックスした気持でいたりすると、すぐ膝の所によつてきたりする。また、「○ちゃんどこへ行ったの?」とか「これ一寸持つていて」「歯がグラグラしているの」等と言いにきたりする。

私は専任の園長になつてまだ六年足らずだが、なりたての頃は子ども達の遊びを見てゐるのが何かはがゆい気がしたものである。たとえば年長児といえはもう六歳の子どももかなりいる。それにもかかわらず遊びが少しも発展せず、だらだらとしている等と疑問に思つたものである。

しかし、子どもとの生活を日々体験して子どもから学んだことは、子ども達の遊びとは実はこの渾沌とした試行錯誤的なところが大切であるということであつた。たとえば新園舎の階段の下にある狭い穴ぐらのような所は当初は大人用の椅子や不用の道具を入れておく場所に予定されていた。ところがここはたちまち子ども達の遊び場として、ままごととか基地ごっこ、おぼけごっこ等の遊びにつかわれるようになってしまった。

ある朝六歳の男児たちがその場所を積木で陣取り、入口にはカーテンをさげ、他の子どもが「入れて」と言つても、容易には入れてもらえなかつた。先に場所をとつた子ども達はそれまでにいろいろのプロセスを経て固い結束ができていたのである。はいれない子ども二人は次から次へと条件を工夫して持つてくるがそう簡単には入れてもらえない。紙面

の都合で詳細には記せないが、この子ども達が先のグループに入ることができたのは遊びが途中で中断したり、何日も時がたってからであった。それも外から傍観していた子どもたちと別の遊びが始まり、それが階段下のグループと合流した形で成立したのであった。

遊びの形は楽しく、仲よく、スムーズに運べたらしいと思うのは子どもを知らない大人の考え方である。生活の中では思うようにいかない相手との衝突や激しい言い合いや、戸惑いや妥協等があり、いろいろの廻り道をしてやっと自分なりに辿りつく「あっそうか」と思う気持や満足感が、何とも言えない喜びとなるのではないだろうか。

子どもの遊びとは始めから筋が出来るものではなく、いろいろやっていくうちに次第に道がついていく。保育者が秩序立てるものではなく、子ども自らが始めた活動を自らの手で試行錯誤しながら遊びぬいていくことが大切である。一年間の反省をしながら新しい年にも一層子ども達が、一つ一つの遊びに集中できる楽しい日々を持てるように、保育に携わる私達の役割をも改めて考えたいと思う此の頃である。

(武蔵野相愛幼稚園)



# 保育の実践と理論を求めて

## 異質な他者と共同の生活を

## 形成する社会的経験

津守 真

カナダとアメリカで、いろいろの人たちと意見を交しながら旅をして、子どもの生活をつくるために私共と同様に日々心を砕いている人々が、現代のこの時に世界の各地にいろことを発見し、心強い思いをもって帰ってきた。それから間もなく私も参加する機会を得た、日米欧幼児教育・保育会議は、主としてヨーロッパの幼児教育の指導者たちが、精力的に二日間にわたって講演された稀有な機会であった。既に多くの方々がこれに参加されてご承知のように、フランス、スイス、スウェーデン、ドイツのOMEPE（世界幼児教育機構）の指導者たちと、アメリカのACEI（国際幼児教育連盟）の指導者が、同じ時に講演し、またそれを聴くということは、ヨーロッパやアメリカに出かけていっても、めったに得られる経験ではない。私は、今回のカナダ、アメリカの旅をも合わせていろいろのことを考えさせられたのであるが、その中からいくつかの点を述べてみたい。

第一には、現実の子どもと家族の必要そのものと取組んでいることである。実際に、子どもは、遊ぶことを欲

している。大人が何を期待しようと、子ども自身は遊ぶことを望んでおり、それを必要としている。幼稚園や保育所はこれにどのようにこたえることができるか。また、この十年間に、母親がはたらくことが多くなっている。しかも、子どもは、預けられるだけではなくて、だれかが本気になって保育せねばならない。これらの問題に対して、欧米の保育者たちは、子どもの観点から、まじめに取組んでいる。既製の制度、規則、指導書にどのようににあてはめるかに神経を使うのではなくて、現実を生じている、子どもの生活を疎外する条件や考え方をどうしたらよいかという生きた問題と取り組んでいる。

グタール女史は、現代の就学前教育の新たな形態について言及し、次のように述べる。

「事実、過去二、三〇年間にわたる多くの国々における実践と研究は、幼児にとり、家庭との結びつきが極めて重大であることを示しました。……われわれは、『家庭の権利』について主張せねばならぬ段階に到達していません。幼児教育を制度化することに伴う危険についても気

づかれ始めています。……」そしてその新しい要求を実現するのに、これまでヨーロッパで発展してきた古典的幼稚園とは違った形態をも必要とすることを述べ、四つの点を指摘している。保育施設が、(1)より開放的になること、家族に対しても地域に対しても。(2)より柔軟になること、施設や企画において。(3)より移動性をもつこと、出向いてゆくサービス。(4)より協力的になること。保健や福祉、社会サービスの機関と。グタール女史は、フランスの幼児教育監督官であり、またO M E Pの世界総裁であるが、幼児のために取組む積極的姿勢には、伝統にとらわれない新鮮さを感じさせられる。このことは、個人の特性もあるうが、人間が生きるために伝統を変えてきた西欧社会の性格がそれを可能にさせているのではないかと思う。過去三十年間の日本の社会の動きを考えるとき、私共の社会は、精神的にも若さを失いつつあるのではないか。

第二には、ヨーロッパの教育改革者たちの精神が、現

代に生きていることである。ルソー、ペスタロッチ、フ  
レーベルの教育者魂（たましい）ともいうべきものは、  
単なる教育史の上の知識ではなく、現代の西欧の幼児教  
育者の中に脉々と流れていることを、スイス、ジュネー  
ブ大学のルソー学院付属園長のデュバルク教授、ドイツ  
の労働厚生社会省のモスカル女史らのエネルギーで  
知的な講演の中に感じさせられた。近年、西欧の幼児教  
育論者の中には、新奇なプログラムを宣伝する傾向があ  
ったが、今回の講演者のように、幼児教育の実際に長年  
たずさわってきた人々は、古典的教育精神を受け継い  
で、現代を生き抜いてきたのであることを知った。

デュバルク教授は次のように語る。

「ルソーは決して古びないと云ったのはトルストイであ  
る。ルソーの考えは現代になお新らしく、われわれの時  
代に栄えるのではないか。」ルソーが強調したように、  
書物の知識は豊かな直接経験と自身の発見に代わること  
はできない。」

「この（ルソーの）感覚教育を実践に移したのはペスタ

ロッチであり、これは後にフレーベルによって幼児教育  
に発展した。」子どもは自然の観察によって発見に至  
る。仲介されない直接の観察こそ大切である。」

「ルソー・インスティテュートは、心理学者のクラペレ  
ートによって創設された。彼はピアジェの先生でもあ  
る。」クラペレートの考えは二点に集約される。ひとつ  
は教育の個人化であり、他は教育の機能化である。前者  
は子どものニードにかなうこと、すなわち、ひとりひと  
りの子どもの深い要求にこたえることを意味する。」

「子どもと共に、子どもによって、ルソーの哲学からペ  
スタロッチの経験主義へ、経験的教育から発生的心理學  
へとわれわれは導びかれてきた。この三者の間には強い  
結びつきがある。子どもにとって重要なことは、周囲の  
自然と一物を、自ら探索し、行為し、発見することであ  
る。幼稚園は、自然と子どもと、他の何ものによっても  
かえられない教師とが会おう特別な場所である。」

第三に、今回米国およびカナダを旅し、また、欧州の

幼児教育の指導者たちの語るのをきいて、私自身、最も考えさせられたことは、西欧の社会が、子どもの社会的経験を重視していることである。それは、従来から云われてきたような、子どもの社会性の養成のためということではない。自分たちとは違った異質な他者を加えてひとつの社会を形成して生きる社会経験を、幼いときからしておくことの重要さである。

このことは、この三十年間に西欧の社会が直面することとなった世界情勢の変化とも関連があるだろう。かつての植民地が次々に独立した後にはひきうけることになった移民の問題、東南アジアの難民、また黒人など、その子どもたちを受け入れるのに、西欧の国々への学校は、並々ならぬ努力をした。社会全体からみれば、不合理的な偏見もいままお強くあることを知りながらも、学校教育がこの問題といかに正直に真摯にとりこんできたかというところに、今回、私は衝撃を受けたのである。そのいくつかを挙げてみよう。

ミネアポリスの私の知人、メアリー・アンの家で、韓

国から孤児を養子にしたとき、その子どもたちが元気に成長してゆく支えになったのは、幼稚園と学校が心から彼を受け入れたことであつた。最初の一週間で、この子どもたちは、幼稚園と学校を、自分たちのものと感じることができた。それはこの子たちだけの特例ではない。他国、他民族、他文化の子どもたちは、アメリカの学校には多数いる。最初は全く英語を分らない子どもたちが、困惑することなしに学級社会の中で生活できるようになっている。学校がそこまで変化してきている。

フランスの学校で、ベトナムの難民の子どもを入れたときに、フランス語が話せるようにするのは勿論だが、そのみでなく、ベトナム語のできる先生をいれる。常勤が困難な場合には、パートタイムで雇う。こうして、それぞれの子ども文化と言語を尊重する。つまり、異質な文化の子どもたちを、ひとつの文化に同化させるのではなくて、異質なままに、共同の社会を形成することを考えるのである。

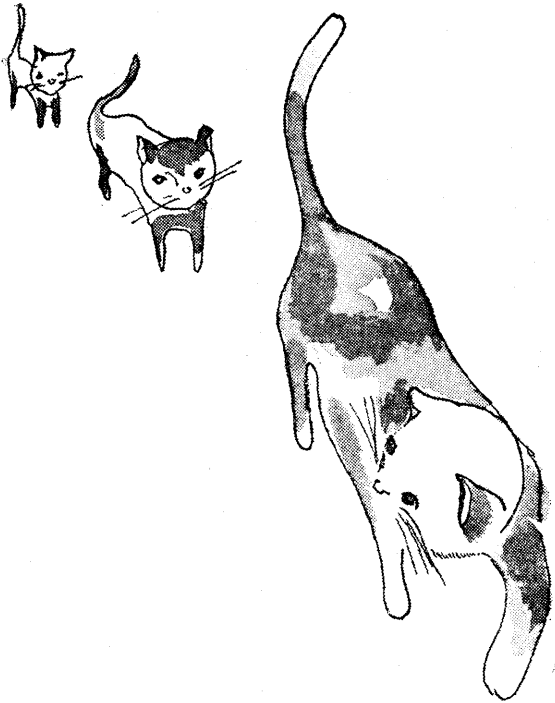
北欧のある学校では、四人に一人は異言語、異文化の

子どもであるという。

グタール女史は、講演の中で、「幼児教育における社会性の概念の展開」について強調し、次のように述べている。

「子どもの論議のこの点で、社会化の概念が前進的に発展してきたことを判断することができます。就学前施設

は、最初は、幼児が友達を通して仲間関係をためすところと考えられました。そして同時に子どもは、小学校の準備として、一層構造化した社会生活に曝されるのであると考えられました。最近になって、子どもを既にでき上った組織の中に受け入れることは、子どもが自らの内部に作り上げている社会関係のすべてを受け入れること



であるとの認識が生まれました。かくて、それぞれの子どもは、その友達を通して、きわめて多様な社会関係と接触するのです。」

「子どもをとりまくコミュニティの真中に、より小さな、子どもたちのコミュニティがあります。就学前教育機関は、その存在を認めてきました。心理学は、子どもの心理的特性を明らかにしましたが、私どもに子どももののグループのまったく独創的な性格に気づかせてくれたのは、就学前教育です。」

「個人の創造性と人間の相互関係の自律性の発達を刺激するような社会教育は、常に平和のための教育に関する私どもの仕事の基礎でもありました。」

このことから見られるように、社会的経験が幼児期に必要であるというとき、それはすでに、個人の社会的能力を伸ばすという考えを超えている。また、社会的適応という考え方も異なる。異質な他者を加えて共同の社会を形成する経験を積むことの必要が強調されているのである。日本の教育では、社会性や社会的態度の育成す

ら、競争原理の上で考えられ、いかにしたら他人よりすぐれた社会性を身につけさせることができるかという考え方になってしまう。社会的経験というときには、発想が全く違う。社会的能力がある者も、ない者も、一緒に共同の生活を形成する経験なのである。

日本の社会そのものが、異質な他者を排除した上で成り立っており、さらにその上に、同質な社会を作ってゆこうとする傾向が、私共自身の中にある。心をひろげて、異質な者を迎え入れてゆくようにすることは、あらゆる場面で、私共の課題なのだと思う。

アメリカの教育界でひろがっているメインストリーム（大河主義）の運動は、このような考え方に立つものである。障害児を普通の学校にいれるということも、この考え方の一環にはかならない。

障害児をどこまで普通学級の中に入れてゆくことができるかという問題については、また別に論ずることにはしたい。

また、欧州・連合体（EC）が、教育の基本として考



えていることは、統一と多様性である。「多様性のあるままに、ヨーロッパの文化的同一性の自覚を励ますこと、また、世界の他の部分との対話と相互理解の可能性を認識すること」と、欧州連合体の教育手引書 (Learning for Life, the Council of Europe's Work for education) には記されている。グタール女史が、幼児教育における社会性の概念というとき、これと同じ考え方の上にあると云ってよいであろう。

私は、これらのことを考えるとき、この三十年間の白人社会の払ってきた努力に敬意を払わざるをえない。もちろん、新聞紙上でみるように、それとは逆の社会的できごとも多くある。しかしながら、少なくとも、人間の理想を追求することを根幹とする教育の分野には、真実にこのことに精力を傾けてきた人々が多くいることは、現実の事実である。私が三十年間にわたって知ってきた人々とその周囲を見るとき、このことをあらためて知らされる。

この点から日本の教育を考え直すとき、私共は、戦後

四十年の間に、次第に世界的理念を見失い、スケールが小さくなってきている。日本の社会全体が、国際化を唱えながら、異質な他者を排除する傾向を強めさえしている。

私はこのことを、単に政治のことではなく、教育の問題として述べている。教養のある人間ならば、だれであれ他者を人間として尊重するのは当然と考えるだろう。しかし、実際となると、比較的同質な集団の者が寄り集まって、常識的理解の中に入らない異質な少数者を受け入れることができない。異質な者を受けいれるときには、私共自らが、変らなければならぬのである。真の教養とは、自らが変化することを可能にするものではないか。子どもの教育においても、教員養成における教育においても、私共の日日の自己教育においても、真の教養と文化とを必要としている。その基礎の上に立たない政治、教育、福祉は、異質な他者に対しては、蛮行とすらなり得る。

幼児教育において、西欧の指導者たちが、異質な他者と共同の生活を形成する社会的経験という考え方に至ったのには、最初に述べたように、第一には、彼らが現実の子どもと家族の必要そのものと取組んだこと。第二には、ヨーロッパの教育改革者たちの人間教育の精神が背景にあったことによると云ってよいであろう。そして、現代の技術化された国際社会と社会変化に直面したとき、この社会的経験という考え方が生れる必然性があった。

このことは、子どもの生活の実際についていうと、決して目新しいことを云っているのではない。幼児は、もともと、皮膚の色や言語の相異があっても、その子どもたちと砂やつみきを共にして遊び、けんかし、また遊ぶ。子ども同士の直接のふれあいによる遊びは、むかしも今もかわらない。それを人為的に変えているのは大人である。

ひとりひとりの子どもが十分に満足して遊べるようにするにはどうしたらよいかというのが、幼児教育の最

も現実的な問題である。また、そのことが、ルソーからフレーベルへと教育改革者たちが強調した点でもあった。現代でも、子どもは自分の手足と身体を使って遊ぶ機会を与えられるとき、テレビの前に坐っていることよりも、遊ぶことを選ぶ。

子どもが十分に遊ぶことのできる空間と時間を与えること、それを保障する大人を養成することは、現代の西欧の幼児教育の指導者たちの最大の関心である。

このように考えてくると、家庭における保育と、幼児教育施設における教育との関連が問題になる。幼児教育は保育なのか、教育なのか。それは果しない論議になりかねない。

この点で、グタール女史が指摘されたことはほとんど結論を出している。

「どこにおいても、幼児の教育は、発達のすべての側面を考慮せねばならないことは、いまや広く認められています。この新しい自覚から、かつては世界中で用いられていた『就学前教育』という語は、『幼児期の養護と教

育』 Early Childhood Care and Education という表現に次第に変えられています。『養護』Careと『教育』Educationとは、実際、共生しているものです。幼児に与えられるすべての養護は、ある面では教育の源であります。そして教育をすることは、(それがもたらす配慮のゆえに)一層の養護を加えることとなります。」

日本語には、ここでいう養護と教育を一緒にした保育という語がある。西欧語にも同じ概念の語が生れてきたといっってよいだろう。

\*マドレーヌ・グタール「幼児教育の世界的展望とフランスの就学前教育」現代保育、Vol. 33. 一九八五年十月号、チャイルド本社

(愛育養護学校)



S F 的 読 き 解 き

子 ども と い う 風 景

## 第 九 回 忘 却 と い う 贈 物

堀 内 守

忘 却 と は

「あ の 頃 の こ と」と い っ て も、 あ な た は お ぼ え て い な い  
で し ょ う ね。 お ぼ え て い な く て も い い の で す。 い や、 い  
ち い ち お ぼ え て い た ら 大 変。 神 経 の 負 担 が 多 く な り、 そ  
れ だ け で 動 き が と れ な く な る に 違 い あ り ま せ ン。

あ な た が 忘 れ て し ま っ て い る と い う の は 天 の 配 剤 か も

し れ ま せ ン。

そ う で す ね。 あ な た が 私 た ち の 保 育 園 に 入 っ た 頃 か ら  
書 き は じ め ま し ょ う か。

あ な た は 数 日 間、 門 の と こ ろ で お 母 さ ん と 別 れ る の が  
い や だ と 言 っ て、 大 声 で 泣 き わ め き ま し た。 大 き な 声、  
額 の 静 脈 を 浮 き あ が ら せ、 汗 を か い て。 私 が 抱 き あ げ  
て、「じ ゃ あ、 お 母 さ ん に バ イ バ イ し ょ う ね。」 な ど と あ

やしても泣き止まなかった。他の保母さんたちも、あなたのこの様子を見て、「あら、本園の記録破りだわ」と言ったくらい。なぜなら、ふつうはどんな子どもでも、三日か四日で大体慣れ、親と機嫌よく「バイバイ」をやるのに、あなたは一週間たってもまだぐずぐずしていたからです。三歳児といっても、早生まれのあなたは満二歳になっていなかったからでしょう。

この頃の記憶はだれにもありません。それでかえってよいのです。なにしろおぼえることがいろいろあつて、余分なことは片端から忘れないと、カンジンなことの編集ができないからです。

保育園の生活に「慣れる」という意味だつて一様ではありません。朝、定刻に出かけてくる。これだけでも大変。着替え、洗面、用便、食事、出発の支度……。

この頃のあなたは、そういう複雑な仕事の「手順」も順序もわからない。だから、横にいますお母さんが手取り足とりして教えずにはならなかった。こういう平板な記述では事態の何百分の一しか伝えていないような苛立

ちも感じます。

着替えること。これだけ取りあげても、事はかなり複雑です。てきばきとやるとはどうてい考えられませんか。ボタンを外したり、はめたりするだけでも時間を要します。まわりの人はそれをていねいに教え、あるいはじつと見守つてやらねばならない。何度教えてもできないということもあつたに違いない。あるていどやれるようになってからも、子どものあなたは途中でボンヤリしてしまつて、お母さんを苛々させたことでしょう。

あなたの忘却の力、すばらしい。なぜなら、この間に、あなたのお母さんやお父さんをよく怒らせ、嘆かせたからです。

早く早く

あなたのお母さんは、この時期あなたに向かって何回となく「早く早く」とか「急いで急いで」と声をかけたことでしょう。うまくできないあなたに向かって「次はこれをやるのですよ」と「順序」をいちいち指示し、そ

の行動を促し、わき見をするのをやめさせ、気分れのあなたを一定方向に向かせる。それをこの簡単なことばで命じるのです。そしてそれでもうまくいかないと、半分嘆き声をまじえて「何やってるの！」と声を高めたに違いありません。

そう言われたのはあなたです。

しかし、この場合、「あなた」とはどういうこと、でしょうか。確かに名前をもった一人の人間です。が、形成途上の人間、いまだ自分のことを自分でやることのできない存在です。責任がとれない存在です。だから「早く早く」と言われたところで、その期待どおりにやれることはない。あなたのまわりの人びともそれを承知の上でなお「早く早く」と急かしたというのが真相です。ついでながら、いくら早く早くと何回もおっしゃったとしても、あなたのお母さんが例外的にきびしかったということにはなりません。

ついでだから書きそえておきます。私はある時、保育園PTAの際に、「お母さん方は子どもに向かつて一日

に何回ぐらい『早く早く』とおっしゃいますか」と訊ねてみたことがあります。その時、皆さんはたがいに顔を見合わせて、「そーねえ、3回ぐらいかしら」とか「私は5回ぐらい」というように、ヨソ行キの答をお出しになりました。まさにヨソ行キのキレイゴト。ホントはこんなものじゃない。その倍になんなんとする回数なのですよ。しかも、これが子どもが十歳を過ぎててもまだ続く――。

でも、決してこれを私は非難しようとは思いません。むしろ逆なのです。それでもしないと、行動の「手順」や「順序」は体得されない。忍耐と苛々ととまどいのごっちゃになって、やっこさという形で。この始終をていねいに見てきた私は、この、いかにもナマナましい(ヨソ行キでない、キレイゴトでない)実態を重視したいのです。

でも、あなたはこの経過は全然おぼえていないでしょう。そして、当事者の一人だったあなたのお母さんもそのことをケロリと忘れてしまっておられるはず。幼



児期から少年期へと移るこの間に生起する右のようなドラマ（私はあえてドラマといたいです）は大らかな微笑みを誘います。

汗を流して「早く早く」とあなたを急<sup>+</sup>きたてていたあなたのお母さんも、いまはその頃のことを口になさらないでしょう。結構なことです。ああ、すばらしき哉。忘却よ。

でも、この忘却は平板に受けとめてはなりませんよ。全部消え去ったではありませんよ。

あなたがある行動をするにあたって、手順やコツや要領を体得（身につける）できたから、そのおぼえる途中のことどもは忘れてもいいのですよ。

家を建てるときの足場のようなもの。家が完成すれば、足場はとり外される。そして足場を組んだこと、足場を頼りにしたことを忘れてもいい。まあ、こんなたとえで考えることもできますね。

## 子どもの演技

あなたは保育園に慣れるのに時間がかかりました。下駄箱にはきものを入れ、カバンを外し、中から連絡帳を出し、お手ふきを出して所定の場所に掛けるのにもいつもうろろう。それができて他の子どものように自由時間に庭で遊ぶということをやらないでいた。椅子にすわってぼんやりとしている。

行動がのろかった。でも、私たちはあなたに向かって「ゆっくりでもいいのよ」といって励まし、認めてやることに心をくだいていました。ふしぎなことに、そういう承認があなたを勇気づけ、あなたに張りを与えはじめたのです。

あなたは私の期待した以上に良い子ぶりを発揮し出しました。

他の子との競争もはじめました。あまりにも保育園で演技をやり過ぎるものだから、お家へ帰るとヘトヘト。結局、お家の中では以前と同様の「甘ったれ」だったようです。

この二つの世界をくらべてみると面白いですね。保

「育園」は、あなたにとって「晴」の場所。実力以上の演技ができる場所だった。これに対し、家は、本来のあなたが憩う場所だった。

保育の先生たちは、時折、こういう子どもの演技をそのまま認めています。つまり、「ああ、少し無理をしておこなっているな」と思っても、「演技だ」とは言いません。そう言ってしまったらすべてオジャマンになってしまいますもの。

保育園の生活で子どもの個人差がいちばんよく出るのが食事と用便という二つの場面です。そして、おわかりのように、この二つの場面は、保育園において決定的に重要な訓練に属するのです。

食事とは、ここにおいて何というさまざまなレベルのとまどいを見せるものでしょうか。ある子は箸を全然使えない。箸をもつことができない。まるでチンパンジーでさえ、こんなつかみ方をしまいと思われるほどおかしなつかみ方をする。そして、よく箸を床に落としてしまふ。手づかみで食べる方がはるかに「器用」な子がいる。

る。焼きそばの冷たくなったのを左手で器用に口へ運び、口のまわりをみごとに汚しながら食べる。食べるといっても、ゆっくり噛むなどは考えもしない。とにかく食う。食らう。摂取する。

早い子、遅い子がみごとに出てくる。

でもね。この段階でいくら遅くとも私たちは全然心配してはいません。だって、昼食は四十分もかかって、ぼんやりしていたあなたが小学校の高学年になるや「早食い」とアダ名がつくくらいに「成長」したのですから。

あなたは私たちの見通しに自信を与えてくれたわけですから。

トイレット・トレーニング

さて、これからは一般論で言いまししょうね。

どの子も一度や二度、トイレで失敗しています。保育園でいう「オモラン」です。これにも大から小までの幅があります。定時に用便を済ませること。このことがなかなかうまくいかないのが幼児です。身体のリズムが違

うからか、生活のリズムの違いによるのか。

ともあれ、保育園では着替え用の下着をたくさん用意しています。これのお世話になる者が多いのですよ。所  
知らず、時知らずというくらいです。

人間が排泄ということを自分でやれるようになることは大変な訓練の結果です。そして、それがきちんとやれるようになると、行動のパターンも変わる。

こんな形で行動が活発になり、行動範囲も広くなるのです。オムツが外せ、さらに定期的に自分をコントロール

ルできるから。

殊によると、私たちが「人格」と呼んでいるものはトイレット・トレーニングあたりから始まるのではないのでしょうか。老いた人の世話をしながらつねに心に浮かぶのが右のような感想です。

あなたが「オモラシ」をしたかどうか。はっきりとは申しあげないでおきます。可能性は大です。しかし、だれがああなたの失敗の世話をしたかは申しあげない方がいい。なぜなら、いま成人したあなたが、その昔だれそれ



に「オモラシ」の際世話をしてもらったというようなことがわかったとして、あまり気分はよくないでしょうから。こういうことはこっそりとしておくのが正しいのです。

でも、あなたはその頃のことをおぼえておられない。だからいいのです。もし、記憶がはっきりしていたらあなたは気軽に外を歩けないでしょうから。

だれも似たような失敗があった。それが普遍的だから、忘れるということが必要なのですよ。「オモラシ」をしたからといって、だれもそのことを記憶に残さない。ありがたいことですね。だからこんなことを書いてもいられる。

ふしぎにも、微笑ましいのは、保育園のトイレの小さなこと。戸をへだてて用便をしながら、たがいに話していたり、歌をうたっていたりする子もいました。あなたはさしずめその筆頭で、大きな声で歌をうたいながら「まだ出ない」などと言っていましたっけ。

## 折ること

折り紙は楽しい。あなたは折り紙が得意じゃなかった。「折る」という平板な作業でも、子どもにとっては複雑な工程の組み合わせです。あなたは「折る」。しかし、人さし指や中指を使って、ていねいに折り線をなぞることがうまくなかった。指の腹で押さえこむコツがわからなかったのでしょうか。だから、あなたの折ったツルはどこかぶくぶくふくらんでいたし、あなたが折った箱はいびつだった。それなのにあなたは折り紙をよくやっていた。ハサミが使えるようになると、切り紙をやっていた。子どもの器用さというものがこんな形であらわれるものかということをよく教えられた感じでしたよ。

いまでも紙をくるくるとまわしながらハサミである形をつくり出して得意になっていたあなたの顔が思い浮かびます。

## 鉄棒

砂場の近くにあった鉄棒にぶらさがっていて、あなた

はドシンとしりもちをついたことがあった。大変なこと  
でした。うまく落ちないで、手首の骨がおかしくなっ  
た。医者につれていき、白いホータイをしてもらって保  
育園へ戻ってきたら仲間があなたを取り囲んで白いホー  
タイをじっと見つめている。

あなたはその時「ヒーロー」だった。

衆目を集め、みんなから心配され、気をつかってもら  
い、それまでにない経験をしたからである。

ケガがなおったときからあなたは鉄棒をコワがらなく  
なった。それは私たちの予想とは反対でした。恐らくあ  
なたがもう少しのあいだは鉄棒をコワがるに違いないと  
いうのが私たちの共通の見方でした。ところが反対だっ  
た。あなたは私たちの予想をくつがえし、サカ上がり  
を軽々とやってのけました。

鉄棒でも跳び箱でもそうですが、あれらを上手にやれ  
るようになるまでには、恐怖心をなくすという前段階が  
必要なのです。そのことをあなたから教わることがで  
きました。だから、いまでもあの小さなプールに入るの

にもコワがる子がいますが、そのとき水をコワがるのを  
どうやってなくすかに心をくばっています。

コワがらなくなったらあとはスイスイといきます。コ  
ワイという感情が全身をかたくしてしまふのですね。

### 歌うこと

こんなことを書きつらねているうちに、あなたがほと  
んど忘れてしまっておられることどもが次から次へと浮  
かびあがってきます。

先ほどあなたがトイレで大きな声でうたっていたと記  
しました。しかし、あなたはみんなといっしょにうたう  
ときにはあんなに大きな声が出なかったのです。小さな  
口をあけてワントンポ遅れていくようでした。

毎日保育園では何回か歌をうたいます。朝も、帰りの  
時も。それぞれは、ある心的な準備のしるしだったの  
です。そういうときにはあなたの声は大きく出ました。け  
れども、そういう実用的な目的から離れた歌を学ぶ段に  
なると、あなたは急に消極的になってしまつて、見てい

ても別人のように思えました。

なぜだったのでしょうかね。

朝、みんなが登園します。そしてしばらくのあいだは自由時間です。そのとき部屋に入れというためのしるしとして、この保育園ではずっと同じメロディを流していました。何だったか、ご記憶に残っていますか。殊によると、何回も耳にしたはずなのに、そのメロディすら忘れてしまったとお答えになるかもしれませんね。ともあれ、このメロディがかけられると、あなたは（外に出るのをいやがっていた頃のこと）まっ先に椅子に腰をおろし、他の子どもが外から急いで入ってくるのを待っていました。あの「待ち」の姿勢は、きっと消極的というよりも、先を「読む」ことの子どものらしい対応だったのかもしれませんね。

メロディが流れる。とたんに、あなたが身ぶり手ぶりよろしく遊戯の形で応ずるようになったのはもう少ししてからです。のびやかにできてからです。

遊戯というものがメロディと身ぶり手ぶりを結びつけ

るきっかけとなったのでしょうかね。

さあ、その最初の遊戯は何だったか、おぼえておられますでしょうか。

そうですね。「むすんで ひらいて」です。

### 遊戯

これを私は最初の頃教えました。まだ小さかったあなた方に。自分でやってみせながら口でうたい、口でうたいたながら手を叩いたりして。そのときの小さな手のかわいかったこと。手を叩くときの音のかわいかったこと。輪になってぐるぐるまわるとき、男の子も女の子もリズムに乗っていました。どの辺でやめようかと問うても、「まだまだ」といって、くりかえし、くりかえしやりたいと主張したあなたの顔と顔。

遊戯をいくつもやれるようになると、あなたたちはお家に帰ってからそれを披露してみせたようです。そういうチャンスもふえたのです。その結果、あなた方はいつのまにか保育園と家結びつけるメッセンジャーのはた



らぎもするようになりしました。「お便り帳」にお家の方からの通信がふえはじめました。

こういう記録は残っているかもしれないね。そして記憶のないところを補ってくれ、あなたの「過去」の一部を再現させてくれることでしょう。いろいろなことがあったとあなたは思い出されるはずですよ。とはいっても、それはすべてを再現してはくれません。一部である場合もあります。

しかし、そういう思い出は、他面で、今日のあなたとつながっているのです。あなたの拡がりも深みも、こういう異世界（もうそう呼んでもいいまでにあなたは成長した）と接触して見ることはじめて明らかになるようですよ。

SFのテーマに「ファースト・コンタクト」というのがあります。また「タイム・マシン」に乗って、自分の「ルーツ」をさぐるというテーマもあります。いずれも異文化、異世界との接触を示していますが、子どもという風景との接触もそれと同じです。毎日慣れている風景

はさして私たちの関心を惹きつけないでしょうが、時にはこういう「接触」や「交流」を試みても面白いことです。それは遊戯かもしれませんが。しかし、遊戯なればこそ、できあいの物の見方を超えるきっかけを与えてくれるに違いありません。

「子どもという風景」は、そういう契機のことなのですから。

(名古屋大学)

## ポルターガイストの話(一)

### 1

ポルターガイストに関心をもちはじめたのはごく最近のことである。一九世紀の聖母マリアの奇蹟を追いかけているなかで、たまたま出たばかりの三浦清宏『イギリスの霧の中へ——心霊体験紀行』(南雲堂)を土浦の本屋でみつけた。聖母をめぐるフォーク・カトリシズムのとらえ方にも四苦八苦の頃だったから、プロテスタンテイズム文化圏の超自然現象に入ってゆくことにためらい

### 関 一 敏

を感じた記憶がある。比較すると面白いだろうという魅力がいつぼうにあり、焦点の拡散をおそれる気持が他方にあった。駅前から家にむかうバスの中で、あてもなくパラパラとページを繰りながら、やばいなあ、この分野はやばいなあ、なにしろ「オカルト」だもの、とあまり意味のない台詞を反芻していた。結局、この分野に入りはじめたのはその年の秋、今から二年前のことである。

二年間の勉強で、それも心霊体験との直接のつきあいなしに何かを語ろうというのでは、霊の祟りがあっても

不思議ではない。ポルターガイストに限っていえば日本の産ではないから大丈夫かと思っていたら、柳田や南方のとりあげている「池袋の女」はどうもその種の現象だったらしい。昭和五〇年代には立川や八王子にも似た出来事が住民を悩ませたという（宮田登『妖怪の民俗学』岩波書店、一九八五）。しかし、ここで何も尻込みする必要はあるまい。無用に喋りすぎないこと、恣意的な解釈をとおざけること、そしてとりわけこの分野に多いけうりを避けること。つまり、いつもの心構え、平常心をなるべく大切にして、ひとつやっっておこうと思うのである。霊よ騒ぐな。

## 2

ポルターガイストはもともとドイツ語で「騒がしい霊」「騒霊」を意味する。心霊研究の一集成ともいうべきフォーダー事典には次の説明がある。「騒々しい霊。悪意のある心霊的な騒ぎを、ある種の場所、ある種の

人間、多くは疑いを知らない感受性の強い人間の前で周期的にひきおこす。みたところ幽霊屋敷に似て、幽霊にとりつかれた人間がそこにいるかのようである。人間の体に手ひどいケガを負わせることはめったにないが、割れ物をこわしたり、時として家具や衣類に火をつけたりすることで人に大きなダメージを与えてくる。この現象は第三者がくると中断されることがある。また場合によっては現象の威力が増すこともある」（N. Fodor, *An Encyclopedia of Psychic Science*, Citadel Pr., 1966）。フォーダーの記述はさらに続いて、焦点となる人物にたいするポルターガイストの攻撃はその人物が家移りしてもやまない場合があること、この怪異現象をコントロールする方法はないが、まれには問答や親しみのある対応がこれを防ぐこと、一般に心霊現象が闇を好むのにたいして白昼の出来事であること、等々の特徴をあげている。これらの特徴については、多少のニュアンスを含みながら、類書にも同様な説明がのっている。多少のニュアンスというのは、とりあげられる事例やそれを説明す

る著者の立場の違いによって、列挙される特徴のいずれを重要視するかが異ってくるからである。ひとつだけ他の説明例をあげてみよう。これは、日本語で書かれた心靈研究関係の著作のなかで、典拠がはっきりしているという意味で信頼のおける記述例である。「食器や家具が見えない手に操られるかのように宙を飛んだり、原因不明の怪音がきこえたり、不意に部屋の温度が下がったり、あるいは人間の身体が宙に浮かび上がったたりする一群の心靈現象をさす。特定の人間、それもたいていは子供や思春期の少年少女の周囲で発生するのがふつうで、家族以外の人間がその場にいと、現象は起らないことが多い。しばしば驚くべき強い力が作用し、重いソファーが持ち上げられたり、頑丈な金具がねじ切られたりもする。コップや花瓶が壁にたたきつけられたり、ナイフが投げつけられたりすることもある。しかし、人間に直接危害が加えられることは少ない」（山河宏「ポルターガイスト」の項、『新・心靈科学事典』潮文社、一九八四）。

二つの事典から引用してみたのは、ポルターガイストの概略を知っておきたかったことのほかに、両者の記述方法に共通する態度を考えたからである。「めつたにない」「……たり、……たり、「……ことが多い」「また……場合もある」「……こともある」等々の書き方は、著者の不確かさのあらわれどころか、その知識に信頼おける保証書のようなものである。というのも、ポルターガイストは「……もある、……もある」の列挙方式をとらざるをえない数多くの出来事を歴史的に蓄積してきた。たとえば人間の体に直接危害を与えることは「少ない」が、人体に歯型を残す例「もある」、というように（因みにこれを「噛みつく騒霊」biting poltergeistなどとよぶ）。こうした記述方法とその背景にある累積された事例のヴァリエーションのあり方は、「ポルターガイスト」という名称が何らかの実体を直接さし示すというよりも、ある種の徴候が一群となってひとつの言葉にくくられていることを意味している。そこには原因が何やらはっきりしていないが、結果としての現象がひとつの集

合をなすと考えられる場合の医学的命名法、「症候群」  
syndromeと同じ発想がある。なるほど名称は「ガイスト(霊)」だが、それはさまざまな現象とつねにセットになって、現象のほうから推測された呼称にすぎない。近代医学との類比でいえば、症状は山積みされていながら、病原菌のいまだに発見されていない段階である。その病原菌をかりにポルターガイストと名づけたということなのだ。

### 3

かりに名づけられたものだからといって、一群の現象がまやかしだというのではない。それぞれの時代には固有の名づけえぬものがあり、その名づけようのない何もかをカッコでくくってしまう便利な符牒が発明される。命名によって時代の知識の体系が、あたかも不明の現実を消化しつくすようにみえるけれども、じつは手に負えない流動的な認識対象をカッコに閉じこめるにすぎ

ない。しかし人間の心の不思議な運動は、かりの命名であつても、カッコであつても、一度名づけられた対象をその名前によって理解してしまふ避けがたい傾向をもっている。ポルターガイストよりは多分はるかに日本人なじみの深いUFOを考えてみればよい。UFOの原義は「未確認飛行物体」だから、これも「症候群」のかりの名称にすぎないのだが、空中に何やら正体不明のものが出現したときに、あれはUFOだと「確認」してしまえるのが現代の奇妙な状況なのだった。

こうしたカッコ言葉(といっておこう)には不思議に想像力をかきたてる空白の部分があつて、そこに生み落された噂や臆説がいく重にもこれをとりまく仕組みがあるのだった。この仕組みをイメージするには、近年になつて発見された病のひとつ、エイズをめぐる社会的神話(男色家の病)をみるべきである。確認しうるのは免疫不全という一群の現象であり、その原因であるはずの何かはまだ確定されていない。現象と現象以前、結果と原因が医学的根拠をもつてむすびつけられない段階では、

かならずしも根拠のあるとはいえない因果論によって空白部分を充たそうとする社会的試みが生まれる。しかも

エイズという名称がもともと特定の症状に由来する言葉であるにもかかわらず、一度この用語が社会化するや、まるで病因を指示するかのようふるまいはじめる。それは恰度、社会の病原菌としての男色家が身体の病原菌に投映されているかのようである。

カッコ言葉の仕組みに本当に分けいるためには、ひとつひとつの言葉がもつ歴史性を丹念にたどるしかない。それはたんにUFOとかポルターガイストといった、いかにも怪しげな言葉だけの問題ではない。もっともっと親しみのある(？)ありふれた(？)言葉である「死」はどうか。「死」というかりの名称に時代と社会の心性がいかなる意味をみたしてきたか、「死」の噂や臆説が時代／＼にいかなる「生」のイメージを結んできたかを考えはじめたのは、フランス『アナール』派を中心とする社会史的手法の功績だった。では彼らの発掘してきたもうひとつの大きなテーマ、「子供」はどうか。

#### 4

一九世紀聖母出現がそうであったように、ポルターガイストも「子供」と結びついた表象をもっている。それはまた「死」「他界」とのかかわりのなかで理解されてきた歴史をもっており、近代的なポルターガイスト史の発端を一九世紀半ばに設定する点でも聖母出現と並行関係にあるといえる。ただ、聖母出現がフランスを中心とするカトリック圏の出来事であるのにたいして、他方は米英といったプロテスタント圏に属するという対照的な特徴がある。この類似と対比のありようを一步ふみこんで考えていくと、私たちにみえてくるのは(たとえこの表現が唐突に響くとしても)すぐれて現代的な意味を包み込んだ比較文化論的課題である。一九世紀産業社会の黎明期、都市化・近代化(そして宗教的にいえば論争の一点である世俗化が民衆レベルで構築してきた「死」の表象と「子供」の表象は、これらの奇妙な出来事に二



つながらに包摂されているからである。

先に「ひとつひとつの言葉がもつ歴史性」といったのはこのことに関連している。それは語源学的な遡行ではない。概念を原義に忠実にという教訓でもない。P・アリエスが「死を前にした人間の態度」によって「死」の社会史を語るように、「聖母」とその「奇蹟」を前にした人間の態度、「ポルターガイスト」を前にした人間の態度を歴史的にたどること。これらの正体不明の現象との対応のなかで、一九世紀が生み出した「死」のイメージ、「子供」のイメージを個々の文化において飽くまで歴史的にとらえなおすこと。ここで歴史的という意味をもう少し具体的にいかえてみよう。前節でのべたカッコ言葉との関連でいえば、ポルターガイストや聖母の奇蹟というカッコにくくられる以前の事件を細部にわたって復元することである。これらの言葉によってそれ以後の正体不明の不定形の出来事があたかも了解可能であるかのように受けとめられる前に遡って、こうした命名（すなわち分類）がどのようにしてなされたかをその

出来事の展開にそってたどることである。さらにいいかえれば、聖母や天使や死霊をめぐる社会表象史のヨーロッパ的累積のなかで、近代の門口にたつ一九世紀が特定の歴史的事件を媒介にして、その死生観（他界観・現世観）を形成していく発生的過程にたちあうこと。

こうした命名の転回点に位置する歴史的事件として、フランスにラ・サレット（一八四六）もしくはルドルフ（一八五八）の聖母出現があり、アメリカにハイズウィル&ロチェスター（一八四八）のポスターガイストがあった。別名「ロチェスターの怪音」とよばれるこの事件はのちに近代スピリチュアリズム *modern spiritualism* 運動の曙光とされている。

## 5

さて、ここまで書いたところで、ざわつくのは騒霊ではなく、ひとりよがりの書き手の心かという迷いが生じているのだが、今のところはこだわらずに先を書いてし

まおう。ハイズヴィル&ロチェスター事件を考えるためのもうひとつの遠まわりをしたいと思いますと思うのだ。

『ポルターガイスト』（一九八二）という「オカルト」映画があった。S・スピルバーグ（かれは異界からの侵入者がなんと好きなのだろう）制作、T・フーパー監督。今春テレビでも放映した。舞台はアメリカのとある新興住宅地「緑の谷」の一画、家屋は完成しているが庭に小さなプールを作る工事が進行中である。一家は五人。三〇代の父親ステイヴと母親ダイアン、三人の子供たち（ダナー一六歳、ロビー八歳、キャロライン五歳）。父親は「緑の谷」の開発にあたる不動産会社に勤務している。物語の展開は随処にちょっとした小道具をさしはさみながら見る者の心をそらさない工夫がなされているのだが、荒筋そのものは簡単である。嵐の夜、末娘のキャロラインが子供部屋から姿を消してしまう。その前に映画の冒頭では消し忘れたテレビの画面からかすかに声のようなものが届いて、キャロラインと交信しはじめるシーンがあった。やがてその「テレビの人たち」が家の

中へと入りこむのをきっかけに、小さないくつかの異変が家の中に生じ、娘の失踪の伏線となっていた。話のひとつの山は、いなくなったキャロラインを両親が救い出すまでのドラマである。この間に一家を訪れる人間はごく限られている。同じ住宅地の販売営業で好成績をあげていた父親が会社を休むようになり、終日家にとじこまれるようになる、ひきぬきを心配した経営者が一家を訪れる。この時の経営者の話には今後開発する予定の小高い丘にある墓地が出てくる。墓地なのにと不審におもう父親にたいして、前にも同じことが谷の方でもあった。墓を移転すればいいと経営者はいう。「これまでに不満をいつてきた者はいないぞ。いや、じつは不満な者たちがいた、墓標だけを移されてコンクリートの下にとじこめられた死者たちはおおいに不満だったのだ、というのが後段の種あかしになっていた。心霊研究家と霊能力者タンジーナの助言にしたがって、他界との通路のある子供部屋からキャロラインを両親が奪還したあと、もう一度子供を奪い返しに奇怪な者たちが一家に襲いかかる。

さらには工事中のブルの底から、石畳や屋敷内の床から次々と棺が地面をつきやぶって突出し、死骸が転がり出す。敷地はちょうど墓地にあたっており、それを知らずに入居した一家を死者たちの霊が追放しにやってきたのである。

この映画は今おもうと、二つの解釈をポルターガイスト現象について提示していた。ひとつは現象の原因が「死者」にあつて、「生者」である子供は死と生をつなぐ媒介項の役割をになうこと。この解釈は一八四八年の事件にも、地下室の死体からのメッセージを読みとる試みとして登場していたから、いわば古典的なポルターガイスト理解である。心霊科学 *psychical research* がのちに主張しはじめサイコキネシス(念動)説は、ここでは採られていない。もうひとつは、家か人かについての解釈が提出されていたことだった。映画によると、ポルターガイストは家(のある場所)に原因をもっている。キャラクターを媒介者として現われる不思議な出来事も、テレビの回路から家の中に入ってきた地下の死霊たちのし

わざであるから、この場合、一家が引越してしまえば少くとも災難から免れることができる。この点は、ハイズヴィルの出来事と相容れない解釈をとったことになる。三〇キロほど離れたロチェスターに移ってもなお、娘のひとりケイト・フォックスには怪音と変異がつきま続たというのが歴史的事件の眼目になっていたのだから。しかし、もうひとつ、これらとは全く別の(本当に全く別だろうか?)主張がこの映画には隠されているらしい。家庭のドラマ、ホームドラマとしてのオカルト映画というのがそれである。

(この項つづく)

(筑波大学)

## 坂元彦太郎先生を囲んで

### (第二回)

出席者

立川多恵子 (十文字学園女子短大教授)

中村 悦子 (大妻女子大学助教授)

守永 英子 (お茶の水女子大附属幼稚園)

本田 和子 (お茶の水女子大教授)

### 倉橋先生と子どもの雑誌

坂元 倉橋先生が雑誌と直接に関係されたのは、「子どものくに」からなんです。無論そのころは「赤い鳥」運動のシンパであられた訳なんです。先生は「金の船」「金の星」もお好きでした。

「赤い鳥」が大正七、八年。「子どもの国」が大正十一年。大正デモクラシーのころですね。

何が一番の先生の一生を通じて、大きな部分を占めているかという点、子どもの雑誌との関係です。他は皆ちぎれちぎれになってたりするけど、これだけは最後までおやりになった。

「子どもの国」から始めれば大正十年ぐらいからですが、おそらくそれより前に絵描きさんたちとの交流があった。それから、北原白秋とか、野口雨情とは年令が近かったんです。彼らと仲良しでしたね。それから西条八十や武井武雄さん、岡本帰一とも交流がありました。

そういう人たちが子どものことを描いてくれたり、子どものことを歌ってくれたりするのは、それが自分の描いた絵であり、自分のつくった詩である、という感覚をもっておられたようです。その点はほくは偉いと思うんです。先生は童話もつくってないでしょ。

—— そうですね。

坂元 つくろうと思えばつくれる資質や才能をもっていた方であるのに、やらなかった、というのは、結局、編集者だった、と思うんです。世の中は編集者をそれほど大切だと思ってくれないけれど、社会的使命なんですね。自分はやらなくて、人にやらせるが、それを自分がやっただと感ぜられる、という感覚を私も大分学ぼうと思ったんですが、なかなか倉橋先生ほどまでいかなかった

ですね。

—— 倉橋先生が編集者のだというのはおもしろい指摘ですね。

#### 幼児文化の建設

坂元 いろいろな童謡やら童画の先生達と仲良くなった頃、先生は外遊なさるんです。その時向こうから持ってこられたものが二つあります。一つは人形芝居。ヨーロッパの子ども達が非常に好きで熱狂しているのを見て、日本でもやったらいいんじゃないか、と。いわゆるギニョールなんです。大正十二年から十三年に、お茶の水一座と称しまして、人形芝居の舞台を盛んにやられました。

もう一つは木工、木材細工を持ってこられたんです。できるだけいろんな板切を使って、少し大きな仕事の子どもにさせたらいいっていうことを言われたんです。そうしたことが、及川先生や他の人に影響を与えて、皆が

やるようになりました。

先生は幼稚園について細かいことは全然おっしゃらなかったんですが、いろいろな文化的な活動を幼稚園の生活に入り込ませた。私は、倉橋先生の保育理論の功績よりも、このことの方がもっと大きいと思うんです。先生が、幼稚園の一つの保育理論の基本を立てられて、そしてそれをある程度園の実践にうつされたってこともあるけれど、前からの絵描き、お遊戯といったようなものだけでなく、文化的な活動を導入して、混然とした幼児生活から、幼児文化を建設しようとなさったということの方が特筆すべきことだと思うんです。

### キンダー・ブック

それから、「キンダー・ブック」もそういう幼児の文化的な仕事の延長でした。もともとキンダー・ブックは精密な、非常に客観的な、機能的なものだったんです。

そこへ倉橋先生が入ってました。先生はもう少しロマン

チックな「赤い鳥」的なものを少しずつ入れていこう、という意図を持ってました。

そのころは非常に贅沢にいろいろな絵描きさんを使えた時代でして、東山魁夷や鈴木梅吉、ラグーザお玉などを使っていました。

数年前に「キンダー・ブック」の復刻版を出したことがあって、絵描きさんやその家族の方のところに承認をとりに行ったんです。その時東山さんのところにも行ったのですが、「こんなものを出してもらっては困る」とおっしゃいまして、こちらも困ってしまったことがあります。結局三個ぐらい差し換えましたかな。まあ東山さんは、かなり描いてくれましたね。その他、後で有名になる方もかなり描いていただきましたね。

まあ、当時のキンダー・ブックは、編集が時にやわらかくなったり、かたくなったり、試行錯誤を重ねてやっていました。これもキンダー・ブックにライブル誌がなかったから出来たことかもしれません。

キンダー・ブックは値段も安く、情操教育にも役立つ

というので、かなり売れたんですね。また、小学校には、教科書があるのに、幼稚園には何もない、教科書に代わるものとしてキンダー・ブックという風潮もありましてね。それに便乗したのも確かです。

事実、当時店先には、ある程度為になって、ある程度上品な本はそうなかったんですよ。そういう意味においても質的にも中心的なものであったし、また販売政策上も成功したといえるでしょうね。

キンダー・ブックは昭和十五、六年頃がピークですね。そのころの作品は良いがありますよね。それ以降はだんだん戦時色が濃くなっていったんです。

一方「子どものくに」は「子どものくに」で良いところがありますよね。第一紙が良かったんで、絵の色が良かったんです。キンダー・ブックもそれに負けじとがんばったんですよ。

キンダー・ブックは戦争に休止しましたが、戦後私が一番思っていたのは、「昔のキンダー・ブックを出したいなあ」ということでした。フレイベル館が復活した

後、キンダー・ブックを出したいので話に来てくれ、と行って招待されたことがあります。ひょっとしたら、もう再発行されていたかもしれません。倉橋先生は大変喜んでおられました。

—— 昭和二十一年の八月に再発行されております。  
坂元 そう二十二年だったかな。

まあ、そういうことで復活されて、昭和二十六、七年ぐらいは、ベストセラーじゃなかったでしょうか。農協の「家の光」が一番で、その次が「キンダー・ブック」だと言われていた時期があるんです。昭和二十年代の終わりごろだと思えます。

倉橋先生はそうだね。キンダー・ブックと幼稚園とどちらを一生懸命やってらしたかな。(笑)

#### 倉橋先生の遺言

—— 坂元先生は、倉橋先生が昭和三十年に亡くなってから、ずっと編集顧問でいらしたのですか？

坂元　そうです。昭和二十六、七年から私に加勢に来てくれんか、という話はあったんです。その頃先生は病気をなさいまして、来てくれ、とおっしゃったんですが、私は五十才になったら、なんて冗談でごまかしていたんです。

亡くなる一月ほど前にまた勧誘がありました、「まあ、考えますわ」って答えたんですが、その後先生の息子さん（岡山にいて時々東京に出てくれば良いんだから、後を見てくれと頼んでいる」と言われました。そしてその後亡くなられるんですが、私は、ここまで先生がおっしゃってくれるのだから、これは遺言だから、やらねばならない、と思いました。

それから毎月二回ずつ東京に出てきてやるようになってのですが、私は田舎におりますので、及川先生など三人に協力者になってもらいまして、四人が編集顧問で、毎月一回必ず編集会議を行う、という方式になりました。

当時、東京に出てくる度に、お茶の水に来て、幼稚園に寄っていたんです。だから、出張目的地もフレールじゃなくてお茶の水って書いていたんですが、本当にお茶の水に来ることになるとはおもわなかったですね。

#### 他誌との競争

——先生が編集におなりになってから、最初の十年間はともかくとして、昭和四十年代には非常に多くの雑誌が創刊されました。そうした中でキンダー・ブックの革新にものごくご苦労なさったと思うんですが。

坂元　そうですね。確かに昭和三十年代には同じような雑誌が二、三ありましたが、独占に近い形でした。

その後私は幼稚園長になりましたね。これはダブって困るな、と思ったんですが、倉橋先生の教えを守って、決して営業にはタッチしませんでした。

他誌との関係ですが、独占禁止法ができるまでは、話し合って情報を明かしあっていたのですが、禁止法が出



てからは、打ち合わせをすることもできなくなりました。いろいろ探りあったりしていたようですが、私はそれには関係しませんでした。

私は自分で恥ずかしくないものを作ろうと思っていました。皆まねたり、まねられたりしながら良いものを作っていくんです。同じようなものが多くでて、競争するのは結局は文化のためになりますからね。

今は子どもの数が減りましたからね。どの雑誌も大変なようですよ。

その中で、キンダー・ブックは作家や画家、特に画家を大事に育ててきました。日本では、童画、子どものための絵を描くのが職業として成りたてているんです。私にはこれは良いことだと思いますよ。子どもには、下品な、つまらない絵という訳にはいきませんからね。キンダー・ブックの第一の功績はそうした状況をつくりだした一人者であった、ともいえると思います。

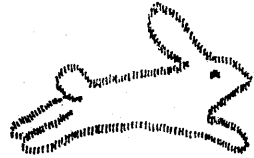
だけど絵の画料は割に高かったんですが、原稿料が安いものですか、幼児雑誌の文章というのはあまり良い

のがない。

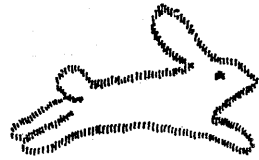
しかし、編集というのはむずかしいですね。幼児教育の研究者などが良い編集者か、というところと一般的にそうではないんです。もちろん例外もありますけどね。やはり編集者というのは、独自の才能とカンをもっている人ではないかね。私なんかも専門にやるとダメだと思っていますよ。倉橋先生もそこが成功されたゆえんじゃないでしょうか。横から見て客観的に批判できましたからね。

# 心の聴覚

燕木寿江



「今年はやっと、念願の第九がN響で、しかもノイマンの指揮で歌えます。十一日はラジオで、二十四日は再放送で三チャンネルの十二時五分からです。上から三番目のテノールの人の隣です。必ず見て下さいね」と、久しぶりで電話のゆうこちゃんの声を聞く、国立音大の音楽科の三年生である。ゆうこちゃんは年長組になる四月に仙台から転園してきた。当時は幼稚園は子ども的人数が多く二年保育の年長組は一組五十名を越し、一年保育が四十名にいくらか欠けていた。納得ずみで一年保育のクラスに入っていた。丁度近くまでいらっしやうた乃川先生にご相談すると「それはいけない。例え何人でも二年保育のお子さんを一年保育の組に入れるのはよくない。すぐ変えた方がいい。」と言われた。本人は「友達もできたから移りたくない」と言い、そのまま一年間は過ぎたが、考慮した上でしたことと言えども無茶なことをしたものと赤面の至りである。ゆうこちゃんのお母様に、新任の先生二人が始まって間もなく電車の中で逢った。その事には全くふれなかったが、降りるまでの二



十分余りを「市ヶ尾幼稚園は音楽教育が遅れている。こんな幼稚園に子どもを入れるのが可哀想だ」と指摘され、園長に伝えて欲しいと言われたことを翌日聞いて、夕方にすぐに園長と二人で伺った。ご主人様が「お前は又、余計なことを言ったのか」とおっしゃった。長い厚い赤っぽい舌をだして、クスクスと肩をつぼめて笑った。音楽の教師をしていたとかで現在は、プロの合唱団に所属していると言われた。なんでも、入園式のあとの、新入園児を迎える在園児の器楽合奏が気に入らず、「仙台ではもっとレベルが高かった。」とこと細かく言われた。話し終る頃には、ゆうこちゃんを囲んで大人四人の顔にも笑顔がいくらか見えてきたが、どうやって幼稚園教育を理解していただけるか——と、話しながら考えていた。長い目で見ていただくよりしかたがない、とその日は別れたが、それ以来急激に親しくなった。

私は、第四楽章、合唱つき——が待ちきれず、他のことも手につかず、カメラを持って座っていた。「わあ、ゆうこちゃん——、ゆうこちゃんよ」と、テレビを指さ

してはシャッターを切った。(フラッシュをたいていた  
せいか、四枚とも画面が真白になって写っていないかっ  
た)二年前に逢った時より髪型のせいか、大人っぽくな  
っていた。近づいて見たり、遠くから眺めたり、一緒に  
大声を張りあげて歌ったりした。毎年聞いているが、今  
年の合唱はとりわけきれいに聞こえた。「九月から週二  
回の練習で、三日休むと出演できず、十二月になって風  
邪をひき熱をだし、それでも頑張った」といまだ張りつ  
めている口調から、受話器を握っている表情が受けとめ  
られた。「一八〇名の声楽科の人が最後には一二五名に  
減った」と言っていた。

私も、昭和十七年、十七才のときに第九を歌ったこと  
がある。神奈川県のアマチュア合唱団が全部集まって参  
加した。アルトが足りないというので兄二人に誘われて  
練習場に通った。女学校の制服しか持っていない私に、  
四才上の兄が青磁色に灰色の入ったヘチマ衿のウールの  
上着を買ってくれた。これなら大きくなってでもずーっと  
着れるだろう、と言った。今思うと随分地味なものだっ

た。スカートはピンクにやはり灰色がかったようなウー  
ルの布を買って女学校の先輩に縫っていただいた。すで  
に両親のいない私は、夜遅くまで留守番をしないですむ  
ことが一番嬉しく、兄達と一緒に電車に乗ったり、横浜  
の小学校の練習場で思いきり歌えることがその次に嬉し  
かった。帰り道も兄の友達とハーモニーを楽しみながら  
歩いた。兄が戦争にいき一人になった時もよく歌った。  
兄との共通の喜びがそこにあった。「ダイネツォベルビ  
ンデンヴィデル、バスディモオデシュトレングゲタイル  
トゥ……」と意味もわからず日本語のように歌っていた  
まま、又、五十四年、五十四才のときに仲間の先生三人  
と、「神奈川第九を歌う会」に九月から週一回通った。  
絶対に風邪をひかないこと。その為に保育がおろそかに  
なっとはいけないことを戒めながら、一時間余りかかる  
練習場に出かけた。夕飯は、駅のベンチでパンを食べ牛  
乳を呑んだ。教育文化会館といっても、地下の狭い所で  
風も通さず、勿論、冷暖房もなく人息れて熱く、「汗を  
かいて風邪をひくから気をつけて下さい」と指導者から

注意を受けた。学生さん、会社帰りの人、年配の方、親子で参加している人、医師、看護婦、商店の人とさまざまな人達が第九交響楽「歓喜の歌」に魅かれて集まっていた。十二月の当日は、平塚の訓盲院の先生と偶然隣りどうしだった。眼が全く見えない様子で、音楽堂に造られた仮設の段をしっかりと手を握って指定の位置まで上った。段といっても幅も狭く足もとに注意を払わなければ将棋倒しになってしまいかねない粗末なものだった。自然に手をつないで、いつまでもお互いに離さずいた。

この手を通して、ベートーベンの音楽の一節が流れていた。次の会場も隣同志で歌った。会が終了すると、若い男の人達が「先生、おめでとう」と言って、大きな花束を渡していた。一齐に拍手が湧いた。指揮者は三十七年前のときと同じく小船幸次郎氏であった。ときどき椅子に腰を下ろしていらっしやう。けれどあの時より、文明の利器か（？）髪の毛があつて若々しく見えた。

十代には十代の感激がある。五十代には五十代の感慨がある。六十代になろうとしている現在、再び歌いたい

と燃えている。曆を戻すことはできない。「時間が無いのよ」「そのうちに歌います」という若者達に是非、味わわせたいと思う。その感動を放さないで次の年代に移って欲しいと思う。日本人程、第九を歌う国民はないと言われる。今年は新国技館で五千人が歌った。科学万博会場で、世界の人が集まって歌った、と報じられている。宗教を持たない日本人の唯一の祈りが「第九」だと言ふ人もいる。世界共通の祈りであるなら、吾もその一人として参加して欲しい。

ゆうこちゃんのテレビの画面が消えて、小塩節先生が、ノイマンさんの言葉を解説した。「ベートーベンはこの嵐のような拍手を、彼が自ら指揮した初演のときには、耳で聞くことができませんでしたけれど、『彼は確に心の聴覚できいたのだ』と——。私達も、耳とそして心の聴覚でしかと受けとめ、歓喜を持って行く年を送り、新しい年を迎えたいと存じます。」「心の聴覚」という新鮮な響きに、限らない拍手を送った。

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち (10)

村 石 京 子

○おだんごやさんのこと

ある晴れた日、5才児はみんなで手をつないで大学構内を散歩に行きました。そして草原に生えているよもぎをたくさん摘んで来ました。

「これでおだんごを作っておだんごやさんごっこをしましょう。」と話しかけると、おだんごやさんと聞いただけでも嬉しくて、みんなにこにこしてしまいます。「本当に食べられるおだんご？」「明日しようよ」などと口々に言ってきました。でも実際にお店を開くとなれば、材料もよもぎだけでお団子が出来るわけではありませんから、いろいろなものを充分に用意しておかなくてはなりません。また、どんな手順でやればスムーズに運ぶだろうかを考えてから、よもぎをあくぬきしてすりつぶすところから、こねてまるめてむしり、出来上ってきな粉にまぶすところまで一度実際にやってみなくてはなりません。

子どもたちは楽しみにしているのに、大人の方があれやこれやと用事がたてこんでしまつて、準備がなかなか整いません。「おだんごやさん、いつやるの？」と聞かれても、「明日やりましようね。」という言葉を出せないで何日か過ぎておりました。A夫はなかでもお店屋ごっこが大好きな子でしたので、期待著るしく、しょつ中「いったいいつやるの。」と真面目な顔をして聞きますので、私はこう返事をしました。「おだんごのもとになる粉やお砂糖を買つて来て、用意が出来たらするから待っていて頂戴ね。」「ふうん、わかつたよ、用意があるんだね。」と納得したような顔でした。けれど、次の日になるとA夫は、「先生、おだんごの粉買つて来た？ まだ買つて来ないの？ 早くしてよ」と矢のさいそくです。私は隣の級のK先生と、「子どもたちが楽しみにしているから、なるべく早くやりましようね。」と話しあつておりました。

そして二、三日経つたある日、子どもたちが帰つたあとの保育室の片づけをしていたとき、教卓の上に手紙がおいてあるのを見つけました。開いて見るとA夫の字で、「せんせい、おだんごのこなをひとふくろあげます」と書いてありました。その一行の手紙には、書いていないいろいろの言葉がいっぱい聞こえてくる気がして、可愛くて笑いながら読んだにもかかわらず、胸がキュツとなるような思いでした。大人のいろいろな事情や都合などで、子どもの期待をいつまでも引きのばしてはいけなさと、しみじみ思つたものです。そして大人が考える以上に、子どもは純粹な心で、いろいろなことが実現出来ることを待ちのぞんでいるのだと知りました。

そして待つこと久しく、いよいよおだんごやさんが開店したその日は、子どもたちはとても楽しく喜んで参加してくれましたし、A夫はといえば看板書きからはじまって、よもぎひきや、おだんごこね、そしてお客さまへのサービスと全くいそがしくはりきった一日でした。「本物のおだんご屋さんと同じか、それ以上においしかったです」というのが、およばれたお母様たちの嬉しい感想でした。

### ○子どものイメージするもの

5才児位になると、子どもたちは実にいろいろな想像力（イマジネーション）と創造力（クリエイション）が豊かになってきて、驚かされることがあります。子どもたちは自分でイメージしたものを、何とか形の上に現わしたいと一生懸命とりくむようになってきます。

N男は、そうした子どもたちの中でも、きわだって熱中する子どもでした。砂場遊びが大好きで、砂場に入っているとき、N男にとって幼稚園の砂場は、道路工事現場であったり、船つき場であったり、ダム建設場であったりしています。そして思う存分遊びこむと、満足したように砂場から上ってきます。工作をするのも大好きです。あるときは銀河鉄道スリーナインをつくり、それが出来るると宇宙基地へ向かってゆうゆうと旅立たせていくその様子を見ていると、何か見事とさえ言える程、自分の考えを遊びの中に投入させているのです。そのひたむきな有様の中には、私ども大人の入りこむ余地がないような思



いさえて、そうっと見守っているだけのことが多くありました。けれどまた、やっぱりN男の心の中を見るのは、外側から見ていたのではなく、彼と会話し、彼と一緒に作業をすることなのだ、迷ってしまう毎日でした。

ある日のことです。N男はダンボール箱をほしいと言ってきました。車をつくるのだというところで、N男のつくったのは外装は簡単な窓わくとドアの形が書いてあるだけのものですが、中の部品がいろいろと取りつけてあります。ハンドルは勿論ついていますし、その他にはメーターもあるし、オートマチック車らしきギアまでもついています。一日目に出て来たものは、外側から見ると、簡単な箱車の感じですが、N男にとっては納得のいくものだったらしくて、早速試乗開始しました。ダンボール箱の車の中にすっぽりと入って、幼稚園の長い廊下をかんだまトコトコと足でこぎながら行ったり来たりして遊んでいます。まわりで見つけた友だちは、「かっこいい!」とか「タクシーなんでしょ、乗せてよ」などと言って、代りあって乗せてもらいますが、小型のダンボール箱の中にしゃがんで入って、足でこいで進むのはかなり大へんなことらしく、他の子はあまり長続きしない様子でした。N男はその後また満足そうに乗っています。

次の日の朝、登園するとN男はすぐに「今日は車に屋根をつけなくちゃね。」と言って厚紙をもらい、屋根を組み立てようとしています。なかなかN男一人の手ではうまくとりつけられないので、大人もちょっと手助けしてこわれないように補強してあげました。N男はガンリンやオイルを充分に入れたみたいです。そして、一人乗りの車に小さくかがんで

入りこむと、N男の姿はもう車の中です。ダンボール箱の乗用車は今日も廊下をトコトコと走っています。

私はしばらく遊戯室で他の子と遊んでいましたが、N男の車は遊戯室まで入って来て、私のそばで止まりました。汗びっしょりになって中から顔を出したN男は「大へんなんだよ、これ走らせるのは……。」と半ば得意そうに、半ば疲れたという表情で言いました。そこで私はふと思いついて、遊戯室にある車輪のついたブロックを、N男の車の底部にガムテープで接着してみることを提案しました。二人してその車輪をつけて見ると、後から誰かに押しもらえば、今度はダンボール箱の車は実にスムーズに走ります。私はとてもいいことに気づいたと嬉しくなり、N男もきつと喜んでいました。これなら友達と一緒に遊べるでしょう。先ずN男が乗って私が後から押してみると、快適に車は走りました。ところが車が止まって中から出て来たN男は、「駄目だよ、これじゃ」と言っさせかく今つけた車輪をガムテープをばりばりとはがしてはしまいました。私はそれでもN男の考えがよくわからずに「どうして？」などと聞いてみますと、「僕の車だから、僕が運転するんだよ」とはっきりと告げられて、やっとのみこめたのです。

N男は自分の車をつくりたいと思って、昨日からそれに取りくんできました。車の中はとてもよく整備されていましたし、故障に備えての修理用のスペナマでつくられてありました。それを見て知っていたのに、私にはN男の心の中までは読めていなかったのです。車の中に入ると、もう外部とは遮断されていかにも車に乗っているという気分だったので

しよう。塗装はあまりきれいに出来てはいませんが、彼にとっては、外側のことなどはあまり問題ではありません。ましてや、自分の車を自分で運転しようと考えていたのに、後から誰かに押ししてもらわなければ動かない車なんて、それがいくらスルスルと走ったとしても、彼のイメージしていたものとは全くあわなかったのです。

大人の平凡な発想から、車輪をつけてよく走ればよいと考えたり、一台の車に交互に乗って友だち同士のかかわりあいも出来たらよいなどと思ってしまったものですが、N男の頭の中には、自分でつくった車を自分で運転したいということで一ぱいだったのです。それは大人から見ると足が疲れてさぞ大へんだろうと思ってしまうのですが、N男にとってそのことはあまり大したことではなく、自分でつくりあげた車を自分自身で走らせるのだという満足感と較べたら全く小さなことだったようでした。

このことによって私は大人のかたまってしまった発想の貧しさを恥ずかしく思ったと同時に、やはり子どもと真正面からつきあい、話し合わないと、子どもの心の中にあるものを充分理解出来ないのだと強く思ったのです。一通りだけを見て、充分に子どもの中の心の中を読みとることをしないで、物事を処理していることがしばしばあるのではないだろうかと反省しました。そして、子どもとよく向かいあうことをするとともに、一人一人の子どものイメージするものを、もっとももっと大切にしていかなければならないと思ったのです。

（お茶の水女子大附属幼稚園）

若いお母さんたちへ

菊池慶子



我が家には三人の子どもたちがおりまして、上二人が

女の子で、小学四年生と二年生、末が男の子で、幼稚園の年長組です。それぞれ十歳、八歳、五歳に成長したわけです、母親の私も、子育て十年ということになります。

何事も「十年一区切り」と申しますが、私もこの辺で、無我夢中で過ごして来たこれまでを振り返り、次なる新しい段階へと踏み出して行きたいものだと、時には考え

たりもしております。

思えば、この年月を通しての子どもたちの成長の確かさに較べると、母親である私は、まさに、「十年一日」の如き歩みでしかないようです。その日その日、精一杯やって来たつもりではあっても、振り返ってみれば、悔いることが多いのです。どうでもいいはずのことに心を奪われてしまって、子どもにとって本当に大切なことをし

ないで済まず、ということが、よくあったように思われます。それは、これからも常に自戒していかねばならないことだろうと思います。私が特にこういう反省をするようになったのは、二年ほど前、機会があり、Hさんというボランティア活動家の話を伺った時からでした。

Hさんは、都会の出身ですが、縁あってこの岩手の農村に嫁いで来たのでした。ご主人は農家の跡取りです。

やがて長男が生まれたのですが、病弱で、先天性の心臓病と診断され、数年の命だろうとの宣告を受けました。

そして、激しく泣かせてはいけない、走らせてもいけない、と言われ、文字通り、つきつきりでの生活が続いたそうです。そして、その子も、もうすぐ五歳という頃のことです。猫の手も借りたいというほどの農繁期、Hさんも農家の嫁として気が気ではありません。「東京から来た嫁は、弱い子を生み、ろくに野良仕事もできない。」近隣でささやかれているそんな言葉は、とうにHさんの耳にも届いているのです。どうやら、子どもは眠ったようです。「どうか、一時間だけ、いい子で寝ていてね。」

と、Hさんは眠っている子に言い聞かせ、田んぼに急ぎました。しかし、何分も働かないうちに、Hさんは何か胸騒ぎを感じ、家に向かって走り出しました。そして、Hさんが見たのは、道の途中で倒れている我が子の姿でした。お母さんがそっと出掛けてまもなくめぐめてしまったその子は、泣きじゃくりながら追いかけて、生まれて初めて数十メートルも走り、とうとう倒れたのでした。

腕の中で冷たくなっていく我が子を抱きながら、Hさんは、「何と馬鹿な母親だったのだろう」と悔恨の涙がとまらなかつたと言います。たとえ医師に宣告を受けていたとは言え、この時の悲しみと悔いは大変なものだったでしょう。Hさんは、「あの時、自分は、一番大切なものを見失っていたのです。」と語っていました。農作業の忙しさ、周囲への気兼ね、そんなもののために、自分の一番大切な仕事をおろそかにしてしまった…と。

その後、Hさんは数人の子どもに恵まれ、農家の主婦として逞しく働く傍ら、地域のために、「子ども文庫」や「お話キャラバン」などの活動のリーダーとして、よ

い仕事をしておられます。おそらく、あの時の体験が、Hさんの活動を底の方から支えているのに違いありませんが、母親としての辛い思いはいつまでも消えることはないでしょう。

この話を聞きながら、私は、私自身の母のことを思っていました。

私に初めての子どもが生まれた時、母が言ってくれたことはこうでした。

「子育ては重点主義でやりなさい。たとえば、家の中がどんなに散らかっていたって問題ではない。そんなもの、子どもが大きくなりさえすれば自然に片付いてしまう。できる限り、ゆったりと一緒に遊びなさい。」

母は、公務員としての勤めを持ちながら、私たち子ども四人を育てた人です。家には祖母もいましたし、それほど寂しい思いをしたという記憶はないのですが、やはり母親とすれば、誰の手にも渡すことなく、完全に自分の手で育てたかったという思いが残るのでしょう。仕事の忙しさや、周囲への気兼ねなどから、思うように子ども

とつき合えなかったという悔いなども、年月を経てもなお、心にあったのかも知れません。母は、家にいて子育てに専念できる立場にある私に、ぜひ自分のそういう思いを伝えておきたかったのだろう、そう感じながら、私はこの言葉を受け取ったのでした。

私自身、初めての子育てにあたって、心に思っていたことがありました。それは、人間にとって、「本当に大切なこと」というのは、そうたくさんはあるはずがない、だから、本質的なこと以外は、全く自由にさせてやりたい、ということでした。また、我が子を他と比較してとやかく言うまい、とも決心しておりました。

子どもたちが幼いころは、やれコップをひっくり返したの、おもらししたの、通りへ飛び出したから追いかける、とかいうような大変さはありましたが、ともかく、「我が子は何とかわいいのだろう、有難い。」という幸福な思いで満たされており、忙しいながらも楽しい毎日が過ごせたように思います。

しかし、子どもたちもやがて成長し、一人、二人、と

学校へ上がり出すあたりから、いささか様子が変わり始めたのです。

まず、学校というところへは「何時何分」までに行かねばなりません。「宿題」もやって行かねばなりません。「給食」も残さず食べなければ、みんなのような「ごほうびシール」がもらえないのです。長女のMには、そのすべてが、とても大変でした。やがて私は、気が付いてみると、我が子をせき立てる母親へと変わってしまいました。いつのまにそうなってしまったのかわからないまま、どうして家のMは他の「しっかりした」お子さんのようにいかないのだろう、何とか人並みに、とか、そんな思いで苛立つことも度々出て来ました。Mは特に、計算が嫌いで、毎日のように出される算数の宿題が苦痛なものでした。とても時間のかかる様子を見ていて、「これは、ちょっと宿題の量も多過ぎはしないか。」と思つて、ある時、学級懇談会で担任の先生に話したことがあります。が、返つて来た答えは、「私は十五分でできる宿題しか出しておりません。」というもので、他の親

たちも、それについて異議はない様子でした。「どうして家のMだけがこうもスローモーなのだろう。」いつものように、私の思いはそのところへ行きついてしまうのでした。

一、二年のころには、学校生活のスピードになかなかついていけないせいなのか、Mは時々、登校を渋ることもありましたが、お友だちと過ごす楽しさで、何とか休まず通い続けました。帰つて来れば、すぐ遊びが始まり、夕方まではMの生き生きとした時間です。夕食後、妹弟たちと遊んだり、好きな本を読んだり、またたく間に時間は過ぎてしまいます。妹の方はその間に、さっさと宿題やら翌日の用意を片付けてしまい、好きなことをしています。「Mちゃん、やらなくちゃならないことはパッパッと済ませて、それからのおんびり遊んだら？」と、たまに声を掛けてはみるのですが、Mが宿題を広げるのは、眠くて目がショボショボし始める頃なのです。またまたあの計算問題。「何でこんなのかなあ。あんまりこんなやると、人間のだいたいな頭が悪くなる

感じがする。」Mは、二年生のころ、宿題をやりながら、こんなことを呟いていたこともありました。気乗りしないのですから能率も上がらず、途中でやめて寝そべってマンガを見たり。私は、声を掛けるべきかどうか、迷ってしまのですが、結局、「もう九時だから、おふろに入りなさい。」と一言だけ言うのです。M自身も、「うん、もうだめ。明日にするね。」と切り上げて行きます。で、翌朝は、ともかく自分で起きて、何とか宿題も仕上げ、出て行きます。こう書いてみると大した事でもなさそうにみえるかも知れないのですが、私の心の中は、「大した問題ではないし、Mがいろいろ試行錯誤してわかっていけばいいのだから、黙ってみていてやろう」という思いと、「いや、ここでちゃんとした習慣をつけてやるのが親の役目ではないのか。」という思いとで、度々、わからなくなってしまふのでした。

一年ほど前の記録をみると、Mのことで次のように記しています。

「宿題をやる時、ピアノの練習をする時、その他、何か

を「やらねばならない」時の、あのシブシブノロノロという様子は一体何なのだろう。Mが生き生きとしているのは、どんな時だろうか。それは、好きなことを自発的にやっている時だ。考えてみれば、それはあたり前のことではないか。しかし、何とかしていやなことも踏み越えてやっていってこそ、人は成長していけるのではないのだろうか。また、好きなことをする場合でも、より深めていこうとするなら、いろいろと我慢してやっていかねばならないこともでてくるはずだ。そこところが、今のMには育っていないのではないか。でも、きっと心配はいらない。長い眼でみれば、もう以前とは違ってきているし、スローモーではあるけれども、学校の課題だって正確にやり遂げているのではないか。いずれは、それもこれもちゃんと育っていくのだ。」

苛立っていた気持ちだが、書き記してみることによってまにか鎮まっていたことが、今になって読み返してみてよくわかります。記録をつけるということは、何よりその時々のも親自身の心の沈静の意味が大きいことを感



じさせられます。たまにはありましたが、こうした日記風のものを書くことで、どうか自分を保ち、それほど方向を誤らずに済んだのではないかと、今にして思われます。

しかし、それにしても、子どもたちが成長し、それぞれの集団の一員となっていけば、否応なしに時間や義務に追われる面は多くなって、幼い時のような親と子の純粋な関係を保つのはなかなか難しくなっていくように思います。何とかして、子どもたちの一人一人とゆったりと過ごす時間を作りたいと願っているのですが。

それに、学校も社会も、「競争」です。そんなもの、たとえあっても、あたかもないかのように振る舞っていくことだって、もちろんできるでしょう。しかし、やはりそれはとても難かしい。親たちはまだいいとして、学校での子どもたちは、常に較べられ評価され、もう、「それはそういうものだ」と思い込んでいて、ほとんど疑うこともないのです。

もう十数年も前のことになりますが、こんな光景に出

くわしたことがありました。あるデパートで子どもの絵の展覧会が開かれていて、私はそれを見に行ったのでした。全国から応募された夥しい作品の中から選ばれて等賞がつけられ、広い会場の中には、本当に見事な出来ばえのものばかりが展示されていました。私は、「よく描くものだなあ」と感心しながら、一つ一つ見て回っておりました。するとそこへ、ひとりのお母さんが、小学生らしい子どもを三人ばかり連れて、何だかせわしく入ってきました。見ていると、そのお母さんは、入口付近に立ちどまって場内をみわたすなり、大きな声でその子どもたちに言いました。

「いいかい。よく見るんだよ。そして、今度はこんなふうを描くんだよ。」

言われた子どもたちは、途端に神妙になり、うつむいたままお母さんに引っ張られるようにして中の方へ入って行きました。

この光景は何故かいつまでも心に残り、特に、我が子たちがあの子どもたちと同じ位の年齢になりつつあるこ

の頃、度々思い返されるのです。

子どもたちが学校で受けている教育というのは、もしかすると、あの時のあの母親の言葉でまさに表わされるようなものではないでしょうか。そしてまた、あの時は、うなだれていた子どもたちを気の毒に思ったはずの私が、近頃あの母親の方に似て来てはいないかと思われたいのです。

絵に限らず、作文であれ他の課目であれ、その出来を人と比べる必要などもとまないとはいえずです。すべては、それを通して子ども自身が豊かになっていくためにあるのだし、最終的に、自分でなければできない何かを見出し成し遂げていくために教育はあるはずなのです。まず母親が、他からの評価などで心が揺れ動かないようにならなくては、と思うのですが、その境地にはまだまだ遠いというのが正直なところです。

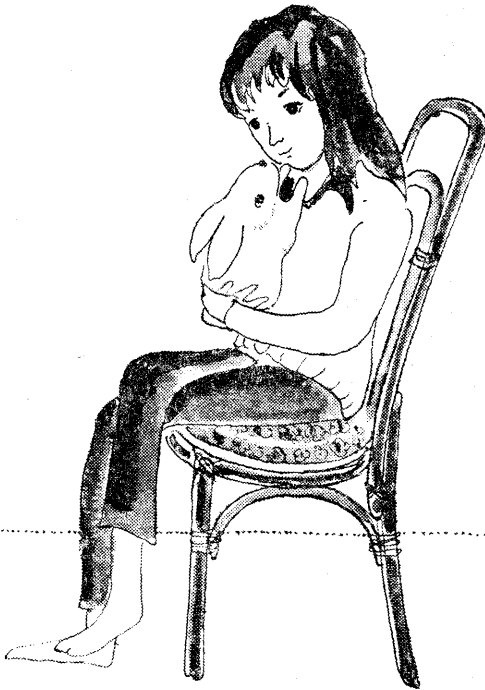
こんな母親の思いを知ってか知らずか、Mは、大好きな本の世界を次第に深めていっている様です。このところ何度も繰り返し読んでいるのは、ローラ・インガルス・

ワイルダーの「大草原」のシリーズです。「宿題」も「ピ

アノのおけいこ」もそっちのけで熱中しているだけあって、Mが本の中からつかんで来るものとはとても確かなように思われるのです。いつか何気なくMが言っていたのですが、「お母さん、大草原の本に一番多く出てくる言葉は何だと思う？ それはね、『みちたりていました』という言葉なんだよ」というのです。それを聞いて、一瞬ぎくりとしてしまいました。いつも、能率的に家事を進めることを考え、子どもたちにも「先々のために」などとあれこれ要求する自分が、何か前のめりに貧しくなっていくように思っていた矢先だったからでした。日々の生活の中で何だか欠けていきつつあるようだった大切なものをほかならぬMによって指し示された思いがしたのでした。

どうやら、これからの私の「子育て」は、むしろ、子どもたちが与えてくれるものの方が多くなりそうです。本当は、これまでだってそうだったのかも知れませんが。

Mのことにばかり集中してしまったようです。二番目のHや末のSのことになると、不思議と余裕をもって見ていられるのです。Mは何と言っても初めての子どもで、すべてが「初めて通る道」だからなのでしょう。親の方の緊張が高くて、Mには済まなかったという思いもあります。それだけ、Mは心の細やかな子に育ったようにも思います。また、MあつてのHやSなのだということも忘れてはならないと思っています。



子どもの成長は本当にたちまちです。その時には悩みや苦しみであったものも、大ていはいい思い出に変わってしまいます。そのことを心にとめて、先を急いだりせずに、子どもたちの生活を楽しくしていきたいものだと思います。

子どもたちのこと

## 十、ふたごの姉妹

大橋 利恵子

「ふたご」っておもしろいな、久しぶりに担任した一卵双生児を見ながらつくづくと思  
っている。顔も体格もそっくりで、同じ時に同じ環境に生まれ、同じ様に育ってきている  
のに、何故か性格は少しずつ違ってくる。少しどころか、正反対の性格が見られることす  
らしばしばである。二人一組になってしまっているのかなと思ってみたり、周りの人が、  
同じでは困ると思っただかかわるからかなと思ってみたり……単純に考えたら、全く同じ人  
間になりそうな気がしてしかたがないのに。

今年四月に入園したY子とL子も、顔はよく似ていて、一人ずつだとどちらだかわから  
ないことがある。身長は妹のY子の方が1cmぐらい大きい。これもならべて比べてみない

とわからない。持ち物も着る物も食べ物も、すべて一緒に育ってきていて、何をすることも一緒なことが多い。入園当初は一緒によく泣いていた。三日もすると、L子が泣きやみ、Y子も自然と泣かなくなった。一ヶ月ぐらひは特に差を感じることもなく二人一緒という感覚で見えていたが、それぞれ動きが活発になって、一人ずつでも遊べるようになってくると、いろいろ違いが見えてきた。

まず先に遊び出したり、周囲の子と友だちになったりするのはL子の方が先である。L子の遊びについていくことが多いY子である。自分の身のまわりのことをさっさとできるのはY子である。L子はY子に促されたり、手伝ってもらったりすることがよくある。物事にあまりこだわらないのはL子で、わりに神経質なのはY子の方である。先日、集金日に（当園ではまだ子どもが毎月現金を持ってきているので）Y子のかばんから現金の入った袋と、領収の印を押すノートをさっさと持ってきた。ところがL子はノートだけ机の上にボンと置いてお金の袋はどこにあるかわからないと言う。「たいへん、さがして！」と言うと、一生懸命さがすのは何とY子の方で、本人のL子はちよんとすわっているばかり、あらあらと思ったわけである。

プールに入り始めた時もおもしろかった。最初は二人ともこわがって全然入れなかった。手をとり、体をかかえ、水の中に入れていくと、徐々に慣れていって、すぐに自分でワニ歩きをはじめたのはL子で、どうしても泣いていたのはY子だった。でもL子が楽しそうにやるのを見て、Y子もだんだん恐くないのだなと思えてきたのか、七月末ごろに

は、入れるようになってきた。(しかし、この後、夏休みにL子はポルトがひっくりかえり、こわい経験をし、九月には立場は反対になっていて、Y子の方がおよびていた)。

二人一組でちょうどバランスがとれているから、二人に違いがあっても困りはしない。かえって、少々違っている方が見えて安心なのは事実なのだが、どうして違ふのだろう。母親に言わせれば、小さい時から違っていたそうである。母親が「あら、違ふな」と思った時から対応の仕方に差が出てきたのかもしれない。差がはっきりしてからは、両親、兄弟等周囲の人達との人間関係が違ってくるだろうから、L子なりとかY子なりとかいったものが生まれてきて当然なのだろう。でも、それでは最初に違ふと思わせたのは何だったのか、何か生まれつきに感覚の差のような微妙な違いがあったのだろうか。

こうして考えていくと、教師が、その子に対して持っているイメージというのは、その子に接していく時に、かなり影響していくのだということに気づかされる。それが本当に持って生まれたその子らしさなのか、周囲が押しつけているイメージなのか、よく見きわめなくてはならない。そして、さらに、イメージを固定して、決めつけてはいけないし、また、その子の持っているその子らしさを無視してこちらの好みを押しつけてもならないなど、ふたごの姉妹を見ながら反省した次第である。

(岐阜北幼稚園)

# 幼児の教育第八十四卷（昭和六十年）総目録

## ★一月号

「育てる」仕事の再認識を

—昭和六十年代を迎えて—

津守 真

SF的読み解き

子どもという風景(1) 堀内 守

宗教人類学からみた子ども③ 関一敏

いろいろなことを教えてくれる子どもたち(8)

村石京子

兎園随筆 蕪木寿江

養護学校の日々 津守 真

教育実習ノートから

芥川美千代

光る夢 子どもと椅子の関わりをめぐって

佐治由美子

近代短歌に現われた子ども(二十二)

大塚雅彦

★二月号

視線の過剰

寺子屋の子ども達

—いのちへの慈しみと嫉—

小池正胤

蕪木寿江

SF的読み解き

子どもという風景(2) 堀内 守

養護学校の日々 津守 真

図書紹介「保育の見通し」 江波淳子

ブリュッゲルの「子供の遊戯」最終回

—西洋美術史にみられる

子供の遊戯」小史 森 洋子

★三月号

珍竹林を育てる話

。病気と子ども

「なれっこ」一考

子どもの手術で思うこと 木村民子

窓口すずめの思うこと 天川みな子

子ども達の病気と成長と 塚田幸子

ギリシャの小さな幼稚園での二年間 大多和 檀

兎園随筆 蕪木寿江

ヒグマの子育て 前田菜穂子

子どもたちのこと(1) 大橋利恵子

宗教人類学からみた子ども④

関 一敏

近代短歌に現われた子ども(二十三)

関 一敏

★四月号

終生を支配する幼少年時代の体験

大塚雅彦

養護学校の日々

太田愛人

SF的読み解き

津守 真

子どもという風景(3)

堀内 守

近代短歌に現われた子ども(二十四)

大塚雅彦

兎園随筆

蕪木寿江

子ども・母親・保育者

守永英子

教育実習ノートから

塚田幸子

若いお母さんたちへ

大橋利恵子

子どもたちのこと(2)

浜口紀恵

「迷い子」の話

M・H

★五月号

子供の成長と発達

森田宗一

養護学校の日々

津守 真

SF的読み解き

堀内 守

子どもという風景(4)

堀内 守

近代短歌に現われた子ども(二十五)

大塚雅彦

子どもたちのこと(3)

大橋利恵子

現場報告

幼稚園と男性教師  
由井正人  
いろいろなことを教えてくれる子どもたち

兎園随筆  
蕪木寿江

教育実習ノートから  
村田修子

「親の姿」いろいろ  
オースト

雨の日ってどんな臭い——

ラリアテレビ、ラジオのプレーブ

ック紹介  
小沢誉子

★六月号

六月の花「あじさい」今井百里江子

エッセイ 持ち味を食べましょう

辻 嘉一

養護学校の日々

津守 真

幼児のこころ

滝口俊子

子どもたちのこと(4)

大橋利恵子

若いお母さんたちへ

向山陽子

「いじめ」の心理について(前編)

内田安久

教育実習ノートから

内田安久

ボク、サッカーの選手になるんだ!

★七月号

忍耐と愛と祈り

大槻虎男

SF的読み解き

堀内 守

子どもという風景(5)

堀内 守

養護学校の日々  
津守 真

「いじめ」の心理について(後編)

内田安久

兎園随筆  
蕪木寿江

大人、子ども、コトバ

——「ウサギの子殺し」をめぐる

森下みさ子

若いお母さんたちへ

山本通子

子どもと水

草信和世

子どもたちのこと(5)

大橋利恵子

ヤミ族の子供の問題から学ぶこと

乾 淑子

★八月号

〈特集、緑蔭図書紹介〉

中村弓子

入江礼子

豊田一秀

近藤伊津子

中村悦子

村石京子

津守 真

蕪木寿江

養護学校の日々

堀内 守

SF的読み解き

堀内 守

子どもという風景(6)

大橋利恵子

教育実習ノートから

大橋利恵子



若いお母さんたちへ

宮里曉美

★九月号

胎児経験

勝部真長

カナダ、アメリカの旅(一)

津守 真

SF的読み解き

子どもという風景(7)

堀内 守

子どもが泣きべそをかくとき

榎沢良彦

兎園隨筆

蕪木寿江

子どもたちのこと

大橋利恵子

私の見たインドネシアの幼稚園と子

どもたち(前編)

近藤伊津子

新任のつぶやき

空井葉子

教育実習ノートから

川上美子

★十月号

ロシアの村の教会で

牛島義友

カナダ、アメリカの旅(二)

保育の

理論と実践を求めて

津守 真

SF的読み解き

子どもという風景(8)

堀内 守

子どもたちのこと

大橋利恵子

17世紀オランダ絵画における子供

堤 委子

私の造形教育

福田理恵

私の見たインドネシアの幼稚園と子

どもたち(後編)

近藤伊津子

保育の中の小さなこと

大切なこと

兎園隨筆

守永英子

ふたりでるすばん

蕪木寿江

若いお母さんたちへ

矢崎淳子

★十一月号

佐野恵子

おとなと子どもの間

「まだ子どもだから」を見なお

す

関口はつ江

カナダ、アメリカの旅

保育の理

論と実践を求めて

津守 真

いろいろなことを教えてくれる子ども

もたち

村石京子

「ある午後の子ども達」

向山陽子

兎園隨筆

蕪木寿江

坂元彦太郎先生を囲んで(第一回)

はじめての子ども達との出合い

上坂元絵里

子どもたちのこと

大橋利恵子

おかあさんがおこった

矢崎淳子

若いお母さんたちへ

橋本 都

★十二月号

黒田成子

園長室の窓から

保育の実践と理論を求めて 津守真

SF的読み解き 子どもという風景

(9) 堀内 守

宗教人類学からみた子ども(5)

関 一敏

坂元彦太郎先生を囲んで 蕪木寿江

兎園隨筆 いろいろなことを教えてくれる子ども

もたち 村石京子

若いお母さんたちへ 菊池慶子

子どもたちのこと 大橋利恵子

八十四巻総目録

一九八五年も、まもなく幕を閉じようとしています。一年の時間の速さを感じています。原稿をお寄せ下さった皆さまに、深く感謝致します。

一年間、全く手さぐりの状態でやってまいりました。読者の皆さまが、一体何を感じられ、何を望んでいらっしゃるのか、わからぬまま過ごしてきたようです。そこで、皆さまにお願いです。是非、ご感想をお寄せ下さいませ。

宛先・東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会 「幼児の教育」編集部

一九八六年より、表紙のイメージも変わり、新たにスタート致します。来年は創刊八十五年目です。これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(編集部一同)

幼児の教育 第八十四巻 第十二号

十二月号 ©

定価三五〇円

昭和六十年十一月二十五日 印刷  
昭和六十年十二月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所「フレーベル館」にお願いします。

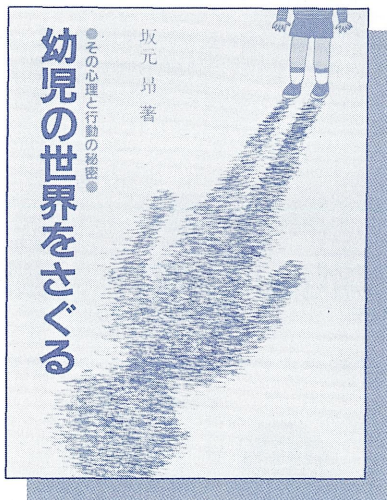
※万一製造不良の点がございましたら、おとりをえいたします。

# 幼児の世界をさぐる

●その心理と行動の秘密●

幼児の世界が目のまえに広がるよ  
うな、全く新しい保育の手引書。

東京工業大学教授 坂元 昂・著



NHKテレビで10回にわたり放映され、好評を博した「おかあさんの勉強室」(講師・坂元昂)をさらにやさしく書き直し、一冊の本にまとめました。幼児のものの見方、考え方、話し方、学び方など、豊富なイラストと写真でおもしろく、わかりやすく構成されています。プロの保育者にとっても、保育上の手引となる絶対の良書です。

B6判・216頁・定価1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館



# トツパンの新童謡絵本

思わずくちくちさんでしまう  
ファンタジーの世界からやってきた新童謡絵本。



いまよみがえる  
トツパンの  
新童謡絵本

3冊セット

定価2,550円

歌に生命<sup>いのち</sup>を与えているのは貴女<sup>あなた</sup>です！人にそれぞれの人生があるように、歌にもそれぞれの歩む道があります。貴女の小さいころを思い出してください。なつかしい、時には勇気づけられた童謡のかずかずが貴女の心の中に

はあることでしょう。いま、フレーベル館では、それらの童謡を新しい企画で皆さまにお贈りします。歌は、なつかしい思い出だけにとどめないでください。歌は、貴女が歌いつづけてこそよみがえるのです。

### 1. ちいさいあきみつけた

うみ どこかでほるが  
ちようちよう ひらいたひらいた  
おんまほみんな ロンドンぼしがおちる  
めだかのがっこう あめふりくまのこ  
ちいさいあきみつけた ゆうやけこやけ  
おおきなたいこ

### 2. サッチャーン

おもちゃのマーチ もりのくまさん  
てをつなごう せんせいとおともだち  
おおきなくりのきのしたで むしのこえ  
チューリップ あかたんぼ  
サッチャーン ジングルベル  
みなみのしまのハメハメだいおう

### 3. てのひらをたいように

しずかなこはん シャボンだま  
ドレミのうた おなかのへるうた  
アイアイ はるのおがわ  
ふしぎなポケット てのひらをたいように  
とおりやんせ おぼけなんてないさ  
かえるのがつしよう

### すいせんの言葉



女優  
中村メイコ

「かーわいーい！！」——この本を見たときの第一印象です。そして「なつかしいーい！！」——口ずさんだとき、思わず心かざーんとなりました。母が私に歌ってくれた歌。私か娘や息子たちに歌った童謡。いい歌がいっぱいです。人と人とのふれあいの場が、この絵本にはたくさんあります。みなさんにぜひおすすめしたい絵本です。

### すいせんの言葉



歌手  
小鳩くるみ

うれしいとき、悲しいとき。子どもたちや、お母さんたちと一緒に歌うとき、いつでもどこでも歌は私の友だちです。長い間みんなに親しまれてきた童謡には、人の優しい心が、みやくみやくと流れています。いまの時代にもびびりあったこの新童謡絵本。いま私は、素晴らしい絵本との出会い、とても幸せな気持ちになっています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

0  
1-A